
黄金のGS

黄金の庶民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金のGS

【Nコード】

N5355K

【作者名】

黄金の庶民

【あらすじ】

突然死んでしまった主人公が適当な神様によってfateのギルガメッシュの能力を手に入れてGSの世界に転生してしまう。主人公は来るもの拒まず、去るもの追わずを基本方針にGSの世界を適当に生きていく。

恐らく（確実に）主人公最強設定になる上初投稿なのでクオリテ

イヤ更新速度はあまり期待しないで頂けると幸いです。

誤字脱字の報告、悪い部分の指摘など甘んじて受けますので気になる場所があればドンドン突っ込んでください。

ユーザー登録無しでも感想を書き込める様にしました。
よかったら気軽に書きこんで下さい。

プロローグ（前書き）

趣味で小説を作る事は有っても、人目につく場所に投稿するのは初めて故にとても迷いましたが思い切って投稿しました。
もし読んで下さる方がいましたら何卒よろしくお願いします。

プロローグ

「……」

えゝ気が付いたら何処もかしこも真つ暗な場所に立っていた俺の
第一声は素朴な疑問だった。

未だに混乱中の頭だが、ひとまずここに来る直前の事を思い出して
みよう

夜のコンビニにてジンプ購入

暗い中電灯の光を利用して読みながら帰宅

横断歩道を歩いていると赤信号の筈なのに猛スピードのトラックが

………何というテンプレ

「何というテンプレ」

思わず声に出してしまった

「なるほど、俺死んじゃったのか」

思ったほどショックは無い

でもまだワンースもNARUTもハンターハターも終わって
無いのに………ってかハンターハンターはいつたいあと何年あれば完
結したのだろうか

『雑種にしては意外と余裕があるな褒めて遣わそう』

「うおーいー!」

びびった!本気でびびった

完全に一人だと思つてた

『王であるこの我が声^{オレ}を掛けてやったのだぞ、そのような態度は無礼だぞ。』

あれ？ちよつと待てよ、この高圧的かつ傲慢的でかつ一人称が我と書いてオレと読ますこのお方はまさか

「英雄…王？」

『ほう、この我を知っているのか雑種』

MAZIDE

英雄王『ギルガメツシユ』

某運命と名の付くゲームに出てくるラスボス的なキャラクターだが何故死後の世界に出てくる

テンプレ通りならここは神様な存在が出てくるんじゃないのか？いや、このお方も半分は神様だけどさ

『呼ばれて飛び出てジャジャンジャー』

そう考えた結果がこれだよ！

何かファンシーな格好したオッサンが出てきた

『いや〜スマンのおワシがお主の望みの神様じゃ』

「ああやっぱりそうなん。」

何かもう既に色々疲れた

『まあそうやさぐれるな死んでしまったお主を別の世界で生き返らせてやるのじゃから感謝しろ』

「唐突に本題ですね、もう少し説明があると思ってましたよ」

『神は忙しいんじゃ人間の都合など知らん』

うわあ思ったより暴虐不尽だよこの人（神だけど）
つてかじゃあ今のギル様は何だったんだよ

『ああ、あれはお主の中で最も強いと言うイメージの存在を作り出した物じゃ。ぶっちゃけ言つとその世界はわりと危険じゃからな、またすぐに死なれちゃつまらげフンゲフン面倒じゃからのう』

「流石神、ナチュラルに心読みましたよ、そして今言い直した部分は敢えてツツコミませんけど、要約するとギルガメッシュの能力を俺に移すと？」

『そこまで分かっているなら話は早い、さっさと行ってこい』

すると突然俺の足下が闇に　まあ元々暗いが　なり、俺はなす術無くその闇に沈んで行った

つーかどんな世界に送るかぐらい教える神

あれから17年…長かった

あの糞神、生き返らせるんなら転生だとはつきり言いやがれバカヤロ！お陰様で意識がはつきりしている赤ん坊生活送る事になりましたよ

中の人は二十歳だったのに母乳やらオムツやら…カットカットカットカットオオオ忘れる忘れる

そんなこんなで今年で17歳になった俺だが外形はまんまギルガメッシュ（髪を下ろしたバージョン）なのだが、意外にも口調は生前

(言い方は可笑しいが)と一緒にだつた(ただし一人称だけは口に出すさいに 我オレになつてしまふ)。まあ肉体や能力は同じでも魂は決定的に違うからな

そうそう、まだ紹介して無かつたな

俺の名前は『ていとくことへに帝督琴紅』

世界でも有数の会社、【帝督コンサルト】の御曹司であり自分で言うのも何だか腕利きのGSだ

そう、俺が転生した世界はGS美神の世界だつたんだ

そりゃ全巻読んだことあつたけど、もうほとんどづる覚えだよ。

最近見たリリカルでマジカルな世界の方がまじだよ

もしくはロストグラウンドでも可

と言つても来てしまつたからには仕方ないので手っ取り早く方針を決めることにした

で決まつた方針は基本は『傍観』で此方からはなるべく原作には関与しないが、向こう(原作キャラ)から何かアクションがあつた場合は物によつては介入すると言つ事にした。

別に無理をしなくてもギルガメッシュのスキル幸運A & a m p ; 黄金律により何不自由の無い生活を送れるのだ、無理をする事は無い

今はただ、前の世界よりも刺激のあるこの世界を楽しめれば良い

プロローグ（後書き）

死亡 転生 17年後

……駆け足過ぎたかもしれません。
次回からは緩やかに時間が進んで……行くと良いなあ。

仕事風景（現場編）（前書き）

プロローグだけで感想が二つも（ガクブル）

本当は批判されないかと不安でいっぱいでしたが
これからも頑張れそうです！

ギルガメッシュには結構ファンが多そうだし批判されないとは少し
気が早いかな？

仕事風景（現場編）

「　　ここか。」

廃墟と化したビルを見上げた後、地図を確認しながら我は呟いた。
こんな廃れたビルにわざわざ来たのは言うまでもなく仕事だからだ。
「依頼されたのは悪霊の除霊、霊の名は成山なりやまきんじろう金治郎、バブル時代に建てた会社がバブル崩壊と共に倒産、社長であった奴は社長室にて自殺して以来取り壊しを行おうとするたび悪霊と化した奴が邪魔をする様になった　　か。」
依頼人に渡された悪霊に関する資料を読み上げ最終確認の為、依頼人に視線を向ける

「ええ、我々としても次の建設の為に早めに除霊していただきたく何名かのGSの方々に依頼をしたのですが…」依頼人はそこで口を閉ざしたが結果は解りきっている。

「　　全て失敗。依頼したGSは全員、重傷もしくは　　死んだか。」

そうでなければ我に依頼するわけが無い。

「　　ええ、生き残った方々が言うには金治郎は周囲の低級霊達を取り込んで並の攻撃ではどうにもならない程に強く、そして巨大になっているらしいのです。」

「　　なるほど、たしかにそれじゃあ、並のGSじゃあ手も足も出ないだろうな。」

私の言葉に依頼人は顔を歪める、不安から出た言葉とでも思ったの

で到着した。

「開かない」

いざ突入、と言う所で扉に手を掛けたがガタガタ鳴るだけで一向に開かない……………

「ッ。結構老朽化ほろくなってるからな、こういう事もあり得たか……………」

さて、どうするか？

扉程度に武器を使うのは流石にどうかと思うしな。

「しっ」

ドゴンと言う音と共に扉が開いた（と言うか外れた）
まどろっこしくなつて来たので我が扉に前蹴り（どちらかと言うとヤクザキック）を放ったのである。

ゲトオブパピロン

王の財宝や乖離剣エアなどの印象が強いがギルガメッシュは筋力Bなのだ（Zeroでは）この位の扉程度なら十分に蹴破れる。

ひいやはや、乱暴な緒方ですねえ」

中から霊特有の声が聞こえて来た。

どうやら、目的はここに居ると見て間違いないな。

「へえ、意識がハッキリしてるのか……………なるほど、有象無象の雑

魚では無いと言う事か。」

これは予想外、

てつきり意識も理性も無くなっていると思ってた。

「まあ良いか、あんたが成山？迷惑だからさっさと消えてくれない？」

既に彼方此方が壊れている部屋の中で唯一綺麗な状態で保っている椅子に座り込んでいる（見た目）中年男性の霊の話しかける。

「ホホホホ、乱暴な上に血の気も多い。」

突然そのような事を言われても、此方にも都合があるのですよ。」

「何を言ってるんだか、こんな潰れた会社の落ちぶれ社長にどんな都合が有るって言うんだ？」

馬鹿な事言ってる無いで我が穩便に事を進めている内にさっさと消えれば良いんだよ。」

挑発気味にそう言ってるやると薄笑いだった表情が憤怒に染まって行く

「潰れてなど無い！俺の会社はまだまだ大きくなる筈なのだ！」

「ナニを世迷事をイッてイル！」

「ハッ、口調が乱れてきているぞ。」

やはり、所詮はただの下郎か多少なりとも知性が有るものだから認識を改めてやろうかと思っただがどうやら我の思い過ぎだった様だな。」

口調が乱れると言つなら我も人の事は言えないけどな。
戦闘前になると、どうにもギルガメツシユの肉体に惹かれて傲慢な
喋り方になってしまふからな。
まあ挑発にはいいんだけどね

「フザケルな！」

「貴様いったいサツキからダレに物を言っているノダ！」

「オレはコノ会社城の社長王だぞ！」

「貴様の様な若造が本来口をキけると思つてイルのか！？」
「そう言いながら成山の霊はその姿を異形へと変えてゆく。」

「ほう、貴様ごときが王だと？」

「面白い、その思い上がりを完封無きまでに消し去つてやろう。」

「

「我は右手に鍵剣を呼び出し後ろの空間に差し込んだ。」

「ハイきて帰れるト思うナよクソガキイイ！」

「巨大な異形へと完全に化した成山が我に向かつて来る。」

「その巨大でかさは今までに取り込んで来た霊の力か、あの質量でまとも
に突撃でも喰らえば並のGSではほぼ即死だろうな。」

「ハッ、化けの皮が剥がれるとは正にこの事よな、だが貴様
ごときでは我に触れる事さえ出来ぬ」

「成山は満身の力を込めた右腕を我を叩き潰さんばかりに振り下ろした」

「ゲイトオブパヒロン【王の財宝】」

「しっかり罪を償って、また生まれ変わって来なあんたの成山金治郎としての人【生】は死んだ時に終わってるんだ。だから」

次の人生ではもっと頑張れよ

その言葉を言う前に成山は消えて行った。

「キリエ・レイソンこの魂に哀れみを」
ほんの少し黙祷をした後に呟いた

宗教なんて知らないし、本当にこれで意味が合っているのかも解らないし、そもそもゲームの台詞だけど、

「まっ、所詮自己満足だしな。」

わざわざGSになったのも一度死んで転生した身としては、何時までも成仏も出来ない霊達が哀れに思っただけの偽善だしな。

「さてと、こんな埃っぽい所からはさっさとおさらばして、報酬を貰いに行きますか。」
スキル黄金律でお金には困らないけど、やっぱり仕事をするなら報酬を貰わないとやる気も出ないからな。

これが、この世界に転生した私の現場仕事の光景である。

仕事風景（現場編）（後書き）

主人公（琴紅）は仕事でこんな感じですよ。

まだGSとしては助手も従業員もいないのでだいたい単独で動きま

す。後、除霊することには容赦はしませんがなるべく霊の意見を尊重したいと思っています。

それと、これからちよくちよく主人公が慎重過ぎないか？と思われるかもしれませんが。

主人公の原点はぶっちゃけ【絶対に死なない事】ですから。

まあ伏線（笑）なのでそれ以上は言いません。

誤字脱字文法の間違いがあれば遠慮なく指摘してください。

感想待っています。

仕事風景（調査編）前編（前書き）

あまり進まないのので前後で分けます。

それにしてもGSなのにオリジナルの話だとギャグが書けない（泣）
まあ、今の段階では主人公一人何でギャグにしようが無いって言う
状態ですが……

早く原作キャラ出したいなあ。

もう数話程したら原作イベントに入る予定です。

目指せ！シリアス卒業（待て）

仕事風景（調査編）前編

「ここか」

前回と全く一緒な台詞で見るのは樹海への入り口であった。

「……………此処って本当に日本か？」

思わず呟いてしまう程の樹海だった。

恐らく入って数分も歩けば日の光はほとんど遮られてしまうだろう、我が何故オレこんな場所に来たかと言えどもちろん仕事だが、今回は除霊では無く名目上はあくまでも【調査】である。

数日前

私の事務所【帝督オカルト事件相談所】に一人の相談者が現れた。

「連続行方不明？」

依頼人から渡された森の写真を見ながら我は聞いた

「はい、この森で最近、行方不明者が多発しているんです。」

今回の依頼人はオカルト研究部と言う高校の部活の顧問の先生
要するに高校教師が依頼人だった。（ちなみに女性）

「何故我に？そういうのは最初は警察に相談する物でしょう、それに何故わざわざ高校教師の貴女が地元でも無い森の行方不明者について相談を？」

オカルト研究部なんて聞いた時点でだいたい予想は付くが念のために確認しておこう。

「……………その……………何と言つべきか……………その行方不明者の中にうちの生徒が混ざっているんです。」

やはりな。

大方、行動力の有る無謀な奴が先人切つて森に入ってそれについて行った部員も巻き添えに　　と言つた所だろうな。

「もちろん警察にも相談しましたが、警察官の方まで何名も行方不明になつてしまい、何の手掛かりも掴めないんです。　　グスツ」
語っている内に目に涙が溜まつて行くのを見てポケットからハンカチを取り出して渡した。

「すみません、取り乱してしまつて。」

「いいえ、お気になさらず。」

しかし、行方不明者を出しながらも警察が何の手掛かりも掴めないとは、

確かにそれは私達^{オカルト}の領域^{問題}ですね。」

我は事務所の机の引き出しから契約書を取り出して机の上に置いた。

「分かりました、その依頼受けましょう、報酬の方は被害者を助けてから相談しますのでとりあえず此処にサインをお願いします。」

「は　　はいつ、よろしく願ひします。」

彼女に名前を書いて貰つた契約書に目を通す。

「OK、商談成立です。遅くとも一週間以内には結果を報告します。」

それともう一つ伝えるべき事が合った

「ただし」

安心したのかホツとした顔をする彼女にこの事を伝えるのは苦しいが

「先に言って置きますが生徒の生存率は 絶望的ですよ。」

一気に顔を青くする彼女を見て、やはり言わなければよかつたかと少し後悔した。

「 と言つ事で此処まで来た訳だが。」

緑が多いのに空気が澱んでいる。

やはり此処は相当な霊地の様だ、しかもかなり危険度の高い。

「真つ昼間なのに何て暗さだ」

予想通り中はだいぶ暗いが周囲の様子が変わらない程では無いのが幸いだつた。

ちなみに今回は鎧を着けていない代わりに高価な護符や精霊石のアクセサリーを着けて右手には一応咄嗟の時の為にBランク程度の盾

を持っている。

あの鎧は意外と重いのだ三十分や一時間程度なら気になら無いが今回の様な長時間の着用は疲れる。

あと金ピカはあまり趣味じゃ無い(寧ろこっちは本音)

数十分ほど進むとあることに気付いた

「 血の匂い？近いな…」

そこから更に数分歩いて行き匂いの元を見つけ其所に有ったのは。

地面に横たわる一匹の黒猫だった。

「 化け猫？いや、猫又か。」

中型犬ほどの大きさの猫などそうそういない。

化け猫かと思っただが尻尾が二つ有るのが見えた

「 黒の猫又がこれほどの傷を？」

猫又の中でも最も力を持つ毛色は黒色だ。

当然、低級霊や中級妖怪程度ならどうにでもなるはず。

それがこれだけやられているなら敵は恐らく上級妖怪の筈
な
のだが

「 (妙だな、何故コイツ以外の妖気も霊気も感じない?) 」

「 うう 」

「 っ」と悪い。

まずは治療だな。 」

王の財宝を開き中から再生を象徴する白蛇が絡み付いた杖
ゲイトオブパレロン

アスクレピオスの杖を取り出し猫又にかざすと全身に刻まれた傷が見る見る内に治っていく。

流石は治療の神アポロンの息子のアスクレピオスが所持していた死者をも蘇らせた伝承のある杖だな。

エリクサー
万能薬でも良かったが見ず知らずの人間から大人しく薬を飲まされると思わなかったからな。

「 まあ、これでひとまずは《キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアア》
「 ツ！ 」

その時、自分の手元から森全体に聞こえんばかりの金切り声
が鳴り響いた。

仕事風景（調査編）前編（後書き）

そういえば天の鎖ってエンキドゥとエルキドゥどっちが正しいんでしょうか？

原作では前者だったと思うけどマンリミテッドコードでは後者だったし？

仕事風景（調査編）後編（前書き）

【危機オハン知らせし叫びの盾】

ケルト神話にてクルフーア王が所持していた四本の黄金の角と四つの黄金の覆いが付いている盾

別名【叫ぶオハン】

持ち主に危機が迫ると金切り声を上げて叫び出す盾
また盾としてもかなりの強度を持つ

クー・フリーンはこの叫び声で三度王の危機があることを知った

既に構想が行き詰まっている黄金の庶民です（挨拶

此方はオリジナル宝具の設定です

前回、最後に大絶叫したのはこれですね。

基本的にこの作品に出てくる宝具の説明は前書きか後書きにて行いますが何か質問があれば遠慮なく言ってください。

重要なネタバレにならない程度ならお答えします。

仕事風景（調査編）後編

硝子が碎ける様な音を上げながら指輪の形をした護符が碎けた。
アミレット

この護符は一度限りの使い捨てだがある程度の攻撃なら持ち主を守る事が出来るのだ。（定価数百万）

「　　ッ 精霊石よ！」

すぐさま背後に張られた障壁に精霊石を投げ付けた。

《キキイイイ！？》

我の背後オレにいた【それ】は精霊石の直撃をまともに喰らい奇声を発しながら吹き飛んだ。

だが

《キキキキケケケケケ》

吹き飛んだその後ろから、同じ姿をした物が嘲笑う様な声を出しながら現れた。

「　　レッドキャップ 赤帽子だと！？何故日本にこいつが！」

30cm程度の小柄な体に斧を抱え、最大の特徴である血で染め上げられた様な赤い色のシルクハットの様な大きな帽子。

「　　なるほど　　どうりで靈気も妖気も感じない訳だ……………」

故こんな大集団で群れを成しているんだ？」

「う……こい……つら……」

「気が付いたか、だけど動かない方がいい、傷は治ったが体力や靈力までは回復していないだろう。」

猫又が体を起こそうとするのを制する。

人語を発したのだから伝わるだろう、

しかし、意外にも少年の様な声だな、もっと年寄りの様な声だと思っただが………今は関係ないな。

「ッ！………そう言う訳にはいきません！此処は僕達の森なんです。

それにあいつ等はこの森に入った人間を何人も殺しているんです。

この森で一番強いのは僕なんです、僕が頑張らないと皆が困るんです。」

「人好きの猫又とは随分と珍しいな。

普通の猫だった時の飼い主がよほど善人だったか。」

「気まぐれな猫にしては本当に珍しいが………なかなか好感を持てる。」

「良いから休め、この我がわざわざ癒してやったのだ、また無茶を

して傷を作るのは許さん
むのが礼であろう。」

我が休めと言ったのだ、疾とく休

向こうの方もいい加減待つてはくれないな。

我は黄金の鎧に換装する。

やれやれ、殲滅戦は得意分野だが、こつも視界が悪いとただ
宝具を射出するだけでは手間取りそうだな。猫又 side

「 そんなッ！無茶ですよッ！貴方は人間でしょう！？あの数
を相手に生き残れる訳がない。」

僕が必死で呼び止めるが彼は聞こえていないかの様に赤帽子達に向
かって行く。

一年程前から突然現れた赤帽子。

あいつ等が現れてからと言うもの穏やかだったこの森は殺伐とした
雰囲気が変わってしまった。

あいつ等はこの森に入った人間を見つけ次第襲いかかり、もう何十
人も犠牲になっている。

僕は今の様な力も無かった日の人間との思い出がある。

まだ子供だった僕を家族と呼んでくれたあの人達は優しく暖かく
て、そんな人間を殺す赤帽子達が許せなくて毎日毎日何日も何週間
も何ヶ月も戦い続けた。

でも今日は何時もと違った。

一匹ずつしか現れ無かった赤帽子が群れを成して襲いかかっ
て来たのだ。

「何を安心するんですか？（何か口調が変わってる？）」

本当に、僕にはこの人が分からない、
周りは完全に赤帽子達に囲まれている絶望的な状況なのに、
どうしてこの人はこんなにも

「この程度の雑魚など例え千匹いようと我の敵では無い。」

まるで王様の様な自信に満ちた声を出せるのだろうか

「さあ！来るが良い雑種共！貴様等が束になろうとも、この我に傷
一つ付けられはしないぞッ！」

彼がそう叫ぶと同時に赤帽子達が彼に殺到した。

その戦いは正に【殲滅】だった。

一斉に飛び掛かって来た赤帽子達に向かって虚空から現れた十二の
武器が発射され、その弾幕を逃れた赤帽子達を真っ赤な刃の剣で切
り裂いて行く。

一撃ごとに消滅する赤帽子だが、終わりが無いかの様に次々に現れ
彼に襲いかかる。

「危ないっ！」

遂に一匹の赤帽子が背後から彼に切り掛かった

が

「ふん

傷一つ付けられん言っただであろつ。」

射出された剣に貫かれその赤帽子も消えた。

全力で切り掛かったであろう筈なのにその鎧には言葉通り傷一つ付いていない。

「どれだけ頑丈なんだあの鎧……………」

改めて見てみれば心配なぞする必要も無かった。

彼の攻撃は一撃で赤帽子を消し去るが赤帽子達の攻撃は彼に決して届かない。

ならば、勝敗なぞ当に決まりきっている。

もはや五十にも満たない数にまで減った赤帽子達に囲まれながら。

「面倒だったが

もう十分か。」

黄金の王はそう呟くと虚空に手を入れ、その中から何かを取り出した。

《ギ ギイイイアアアアアアアアアアアア》

すると、どういう事だろうか・・・それまで留まる事なく彼を襲い続けていた赤帽子達が突然苦しみの声を出しながら次々と消滅していった。

あれだけいた赤帽子達はもはや完全に消え去り、それを祝福するかの様に木々の隙間から光が差し込み彼を照らした。

「 綺麗」

日に当たり光輝く黄金の髪と鎧

その隣には彼が先程取り出した飾り気の無い大きな十字架が立てられ、あの赤帽子達の墓標の様に見えた

その光景が・・・僕にはとても儂く、美しく思えた。

猫又 side - out

「 はあゝ、終わった終わった。」

戦闘で高揚していた気持ちが落ち着き、森に入ってからようやく息を付けた。

「動きが鈍れば良いと思って出したけど、まさか消滅するとわ嬉しい誤算だったな。」

「まあ考えてみれば当然か。」

我は隣に突き刺した十字架を見ながら呟いた。

この十字架はキリストを磔にし処刑に使われた十字架……
つまりは現在過去未来において最高級の十字架である。

レッドキャップは妖精（正確には妖魔だが）なのだが手持ちサイズの十字架や聖書の二三節を読むだけ逃げてしまう程に神聖な力に弱いのだ。

ならば、世界最高ランクの【対魔宝具】であるキリストの十字架を見れば消滅するのも当たり前だったな……

「まッ、流石にこれ以上は出て来ないだろう。」

本来なら最初に襲って来たレッドキャップ達を瞬殺する事は出来ない事も無かった。

けど、わざわざ各個撃破に徹していたのは、この森にいる>全て<のレッドキャップを炙り出す為だったからな。

レッドキャップは本来単独で行動する妖精だから一匹も取り溢す訳にもいかない。

「既に犠牲になった人達は戻れないけど、
これで、これ以上の犠牲者は出ないだろう。」

はあ、こんな結果じゃあ今回は報酬は受け取れ無いな……

「せめて、何か遺品でも見付ければ良いけど

それに犠牲になった人達の霊も成仏させないと……
全く、今回の仕事は完全に赤字だなあ。」

まあ良いか、骨折り損には馴れてるしな。

全く、性格もギルガメッシュに似てくれれば良いのに……損な性格だな我也。

そう言えばあの猫又、何時の間にか居なくなってるな……
……まあ縁があればまた会えるか。

その時琴紅は気付かなかった、猫又は黒髪の少年に姿を変えて琴紅の10m後ろの木に隠れていた事に

「あの人なら……いや、あの人しかいない。

僕の新しいご主人様は。」

隠れていた猫又が頬を染めながらそう呟いた時
琴紅は何故か酷い悪寒を感じたのであった。

主にストーカー的な意味で。

仕事風景（調査編）後編（後書き）

オリキャラ登・・・場？

可笑しいな、こんなオチになる予定じゃ無かったのに。

キャラが勝手に動き出す！これがネット小説か！？（違います）

まあ今回は名前も出てない猫又（君ですが、彼は今後、主要キャラになっていく・・・かも！

今回はようやく原作キャラが登場！・・・予定！

さつきから自信無いな、まあ自分の脳に膿でも沸かない限りは原作キャラ登場は確実！
他は知らん！（待て）

と言っても誰を登場させるかはまだ決まってるない無いんですけどね
（キャラ事にイベントを構想してはいるんですが、誰から出すかが決まってるないと言っ意味ですけど。）

王の休日（教会訪問編）（前書き）

今回は初のパソコンでの投稿なので携帯版だと読みづらい場所があるかもしれない。

それはともかく、ようやく原作キャラを出せました が原作

片手に書きましたが多少口調が違っても知れません御了承ください

（土下座）

王の休日（教会訪問編）

街外れに建てられたやたらと大きな家……
帝督オカルト事件相談所の事務所兼琴紅の自宅である。

一人暮らしでは確実に管理が行き届かないので週に一度実家の雇われ家政婦がやって来る。

もつとも、本人はもともと、此処まで巨大にするつもりは無かったのだが、
建築業者にウツカリ坪の単位を一桁間違えてしまったのだ。

こんな所でそんなウツカリをかますのは流石ギルガメッシュと言った所か。（実際、何の問題も無かったのが恐ろしい所だ、金額的な意味で。）

閑話休題

そして、今日その事務所の玄関には
>本日休業<
と書かれたプレートが掛けられていた。

今我オレはとある教会まで来ている。

そう、GSの教会と言えば真つ先に思いつくあの神父の居

る教会だ。

決して！間違っても！腐れ外道マーボー神父やら、ど
S & Mのシスターが居る教会ではない！（作品が違う）

「……………で、何故我がここに来ているのかと言うと、

実はこの神父とは我がGSの試験を受けた後、ちょっとした事件
で知り合ってから頻繁に交流しているのだ。

故に今日のように休暇を使って合いに来る事はよくあるのだが……………

「おつかしいなあ……………時間は間違えてないよな？」

連絡していた時間に来たのだが教会の扉は閉ざされ、鍵も閉められ
ていたため、我は現在立ち往生を余儀無くさせられている。

「（急な用事？……………否、それならあの生真面目な神父な
ら連絡を必ずして来る筈、

誰かに襲われた？それも否、あの神父が人の恨みを買ったような事を
する筈が無い……………

では悪霊か妖怪に？一番ありえないな、襲われることがあってもあ
の人が殺られる訳が無い。

「となると……………ありえるな）」

我はそこまで思考すると神父から教えて貰っていた鍵の隠し場所か
ら（勝手に）鍵を取り扉を開けて中に入っていた。

すると、案の定礼拝堂で倒れている神父がいた。

「……………はあ、また貧しい人からの依頼が重なったんですか。

「
我は呆れながら頬の瘦けている神父に声を掛ける。

「う や、やあていどく帝督君 元気そうで何よりだよ

ガク」

何とか上体を上げて反応したがそれが最後の力だったのか、再び床に倒れ付した。

「あなたは相変わらずですね。

人の心配をする前にまず自分の顔を鏡で見てくださいよ。

ほら、こんな所で横になつたら身体に毒ですよ唐巢神父。」

本当にこの人はもう……

我はそう呟きながら神父　唐巢神父を抱えて寝室まで運んでいった。

「はあ　　っ生き返つた、助かつたよ帝督君。」

我が王の財宝から

ゲイトオブパピロン

ここにくる途中スーパーで買ってきたパンやらオニギリやらを取り出し

唐巢神父に食べさせた後、

顔色がよくなつた唐巢神父がそう言った。

「　　まつたく……そう思うなら学習してくださいよ。

我が尋ねる三回に一回は餓死し掛けてるじゃないですか。」

その御蔭でここに来る時にスーパーに寄るのが癖になつてしまった。

「いやはや、分かつてはいるのだが「これも性分、もう聞き飽きましたよ」　　いや、すまないね」

自覚は有るんだろうが直す気が無いのも分かっているのでこれ以上は何も言わない。

「構いませんよ、それが唐巢神父の美德でもあるんですから。

じゃあ何時も通り食材を置いときますから、これで少しは持つでしよっつ。」

我は王の財宝から買い物袋を取り出して机の上に置く。

「いやあ 本当に何時もすまないね、

しかし、その四次元箱は本当に便利だね。」

「物を出し入れするだけの能力ですよ、便利と言っても荷物入れにしか使えませんから仕事にはそれ程ですよ。」

「いやいや、謙遜することは無いよ、私を知る限りそんな能力を持つているのは君だけだ、もっと自身を持ちたまえ。」

説明してなかったが我は知り合いやGS協会には王の財宝の事をただ異空間に倉庫を作るだけの四次元箱と言う能力だと伝えている。

こんな人の身に持て余す能力を持っている等と知られたら色々と面倒だからな。

それから暫らく我は唐巢神父と仕事の状況やら取り留めの無い世間話やらをしていた。

「そうだ！唐巢神父、少し相談があるんですが。」

我はここに来た理由の半分を思い出し口火を切った。

「む、何かね？可能な限り力になるよ。」

真剣な表情で聞いてくれる神父に感謝しながら

「 実は 最近」

我は一言一言区切るように

「 猫を飼うべきか迷っているんです。」

最近の悩みを話した。

唐巢神父が座っていた椅子からすっ転んだが真面目な話だ

「………続けても？」

「あ ああ 構わないよ」

唐巢神父は床にぶつけた頭を摩りながら座り直した

「 実は最近、家に頼んだ覚えもない猫用の餌やら猫ジャラシ

やらが次々に送られてくるんです。

それだけで無く！郵便受けには 猫の魅力百選 やら 黒猫大パニツク やら 猫の上手な買い方 やら！猫の写真集や飼い方ガイドの本が気付かない内に家に置かれてるんです！

これはもしや我は潜在的に猫を飼いたいと思ってるのかと思い唐巢神父にどうすれば良いか相談しに来たんです！

「しかも最近！深夜に『猫を飼いませんか？』と言う電話が何度も来て……これはもう天が我に猫を飼えと伝えに来ているんでしょうか！？」

昨日に至っては猫を飼っている夢まで見たんですよ！これはもう何者かの大きいなる意思が我についているとしか考えられません。」

「色々待ちなさい、そして落ち着きなさい帝督君、

君、それ明らかに憑かれてるから……主に変質者が何かに。」

何故、唐巢神父は『駄目だこいつ、早く何とかしないと』と言ってる様な目で我を見るのだろうか？

「まあ、そつちも有りますけど本題は別です。」

仕方ないのでひとまず話題を変えることにした

決して、唐巢神父の視線が痛かったわけでは無い、断じて無い。

「実は先週のとある依頼で

我は例のレッドキャップ大発生について唐巢神父に語り始めた

「……なるほど、そんな事が起こったのか……それだけのレッドキャップを相手に無事で良かったよ。」

「っ ええ、唐巢神父に頂いた聖書が無かったら危なか

つたですよ。」

「そうか・・・確かにレッドキャップは聖書や十字架に弱いからね。」

危ない危ない、咄嗟に出て割には良い嘘だ

唐巢神父は信用してるし信頼もできる人だけど

【原作キャラ】に下手に能力をばらして死亡フラグを立ててるのも遠慮この能力したいからな。

王の財宝はどんな相手でもなるべく隠したほうが良い

まあそのくせ、一人の時はガンガン使うけどな。

「まあ、そのレッドキャップ達は知り合いのGSに頼んで駆除して貰ったので問題はありませんが、唐巢神父も気を付けて下さいね、最近悪霊や妖怪の動きが活発になって来ている様ですから。」

「・・・そうだね、最近は固体の力も徐々に上がって来ているし用心に越したことは無いね。」

「ならちゃんと飯食ってくださいよ・・・。」

「いや　っはははははは、一本取られたね。」

まあこの人に心配は無用か、横島程じゃ無いけど死んでも死ななそうだし・・・。

「じゃあ話は戻るんですが、結局我は猫を飼うべきでしょうか？」

「その話はどういだろう、君の好きにすれば良いさ。」

むう　何だか適当に流されたような気がする。

「じゃあ、今日はもう遅いんでこれで。」

「ああ、もうこんな時間だったか。」

それからまた暫らく雑談をしていると外も暗くなって来たので帰る事にする。

「それじゃあ、また今度。」

「うん、また何時でも来なさい。」
唐巢神父は笑顔で我を見送ってくれた。

ああ、そうだ

「言い忘れてました。」

我、三日後位から妙神山に行つて来るんで、ちゃんと食事を取つて下さいよ。」

晩御飯を外で食べて来る様な気安さで唐巢神父に伝えた。

「分かっているよ、ちゃんと朝昼晩　　つて妙神山!？」

それじゃ〜等と言いながら歩く我の後姿に唐巢神父が必死で声を掛けてくるが、

猫に付いての相談に乗ってくれなかった腹いせに無視をして帰って行った。

「　　愛しいあなたは猫　　。」

家に帰ると、また郵便受けに新しい本が入られていた。

我が猫を飼う日は近いかもしれないな。

琴紅は300mほど離れた場所で覗いている者の存在には全く気付かず

徐々にその者の計画に嵌って行くので合った。

王の休日（教会訪問編）（後書き）

次回！小竜姫登場・・・かも

さて、今回の話はどうだったでしょうか。

と言っても話し自体は進んでないのでどうもこころも無いですが。

今回の話で出たGS試験の後の事件についてはいずれ書く予定です。

蛇足ですが琴紅は猫より犬派でしたが最近洗脳じみた広告のせいで少し変化しています。

これまた蛇足ですが、猫又は夢魔でもありません。

さらにまた蛇足ですが、ギルガメッシュの宝物庫の中には若返りの薬のほか

歳を取る薬やあらゆる傷を治す薬・・・性転換の薬などもあります。

まあ完全な蛇足ですがね（ニヤ）

王と竜神（前書き）

先日、古本屋でHELLSING全十巻まとめ買いしてしまった庶民です（挨拶）

更新が一週間以上止まってしまって申し訳ありませんでした！（土下座）

リアルで春休み中部活道で死んでいたり、先程言ったHELLSINGまとめ買いやら、SSアサリをしていたら更新すっかり忘れていました（泣）

そしてようやく更新したものの、内容も薄っぺらく、もはや謝罪の言葉もありません。

こんな駄目文駄目作者ですが、どうか見捨てずにお待ちしていただけたら光栄です。

王と竜神

妙神山

世界でも有数の霊格の高い山であり、神と人間の接点のひとつと言われている山である。

我は今その山に向かっているのだが……

「この前の森といい、日本のどこにこんな場所が……」

足場が50cmも無い道（と言うより崖）を歩きながら我は呟くのだった。

険しい山道をようやく進みきると巨大な門が姿を現した。

「……だな。」

門の上には【妙神山修業場】と書かれた看板が掛けられ、門には大きな鬼の仮面がそれぞれ片方に一つずつ飾っており、門の両脇には首から上が無い銅像が二つ立っていた。そして、門にはこう書かれている。

【この門をくぐる者汝一切の望みを捨てよ

管理人】

「まあ別に修業しに来たわけじゃ無いんだけどな……」

修業地としてはこれ以上の場所はない。

現に唐巢神父もここで修業して強くなったらしいな……

《我らはこの門を守る鬼、許可なき者我らをくぐることまかりならん!》

なんて考えていたら門に付いていた鬼の仮面が大声で怒鳴りだした……たしか、右の鬼門に左の鬼門だっけ？

原作では特に活躍もしない噛ませキャラだった筈

とりあえず

「すいませ〜ん、管理人さんいらっしやいますかあ。」

原作通りに門をくぐる為に鬼を倒すなんて面倒なのでさっさと責任者に中に入れて貰おう。

《我らを無視するなあ!》なんて声は聞こえない聞こえないっいたら聞こえない

「はいお客様ですか？」

くぐることまかりならん、らしいがあっさり中から開けてくれた

《しょ…小竜姫さまあつ!》

《またしてもおお》

鬼二匹が嘆いているが気にしない事にする。

「お茶でもどうぞ。」

「えっ！あ…ああ恐縮です。」

とりあえず此処の管理人　小竜姫様の中に入れてもらい、どこかの一室（おそらく客間）に案内させられたのだが

「まさか竜神から茶を貰うとは」

胴着の様な服装を着た赤い髪の女性・・・外見は十代後半から二十代前半位だ、

それだけなら見た目普通の女性だが、その頭に生える二本の角と見纏う霊気は人とはまったくの別物だ。

それも当然、彼女は竜神

すなわち、神の一端なのだ。

三分の二が神の血のギルガメッシュオレが言うのもなんだがな。

「なんか、構造技術は古いけど、建物自体は新しい感じがしますね。」
黙っていると間が持たないので話を振ってみる

「ギクッ　　はい、訳合って少し前に大改装したんですよ。」

何故か引き釣った笑い顔に冷や汗を流しながら答えた。

「(.....なるほど、原作の修業イベントはもう終わってる訳か　　そういえば唐巢神父、訪ねた時は修業か何かでいなかっただけ最近居候が出来たって言ってたな)」

居候おそらくピートだろう、となるとブラドール編は終わってしまったのだらう
ならば時間列的にも可笑しくはないか。

「　　じゃ、世間話はこれくらいにして、本題に入りますね。」

今回、此処を訪れた理由は前回とあまり変わらない、

あの森で起きた事件の異常性は魔族が関わっているのでは無いかと思い、念のために神の一端である小竜神様の意見を聞きたくやって来たのだ。

ベストとしてはヒヤクメが居てくれれば良かったのだが、流石にそれほど世の中甘くは無かった。

「　　なるほど.....地上でそのような事が。」

「妖魔の類いが普段とは違う行動を取るのとは大体が上位の魔が関係している事がありますから.....天界の方でも調査をして貰いたいのです。」

魔に関しては人よりも神の方が詳しいからな。

と言っても本来、我がそこまで気にする事も無いんだけどな

なんだかんだ言っても結局は大きい事件は原作キャラ達が解決するだろうし。

「 分かりました、魔族が関係しているかもしれないのなら、天界の方でも調査する意味はありますからね
その件に付いては私から上司に伝えておきましょう。」

「 よろしくお願いします。」

さて、真面目な話は終わった事だし……………

「 そうだ、神様が管理人だって唐巢神父から聞いていたんで……………
つ……………」

そう言いながら我は王の財宝から酒瓶ゲートオブヒロインを取り出した

「 最上級の神酒ネクターです。」

後でお仲間さんと飲んでください。」

その瓶を取り出すと小竜姫は顔色を変えて凝視する

「 …… っそ！そんな高価な物を何処で!？」

「余計でしたか？」

「いえ、お酒はありがたく頂戴致しますが……今、いたい何処から出したのですか？」

「ああ　これは生まれ付き持っていた能力です。【四次元箱】ゲートボックスと名付けています。」

「……簡単に言つと亜空間を作り出して其所に物を収納出来る能力ですよ。」

「なるほど　便利な能力ですね。」

今まで会つて来た人間に何度も話した《嘘》だが竜神様にも納得してもらえた様だ

「ではもう一つだけ……貴方は何者ですか？」

「ッ！」

フイを突かれてほんの僅かだが動揺してしまった。

そのせいで疑念が確信に変わってしまった様で今までと違い睨み付ける目付きで此方を見てくる

「なるほど、やはり神の一端なら気付きますか……」

ある意味当然であろう。

自分達と同じ気配を持った人間に気付かない訳が無い。

いつもは何らかの宝具を使ってその気配を消しているのだが、今日に限って忘れてしまっていた。

ここ一番でミスを犯してしますウツカリはやはり遠坂家に召

喚されたギルガメッシュとしての宿命か……………

「さて……………何から話した物か……………」

ひとまずはこの疑いの視線をどうにかしないと……………

「最初に言っただけですが、我は両親共に普通の人間です。

信じられ無いでしょうが紛れもない事実なのでそれを前提に話しますね。」

それから我は今生きている以前の……………要するに前世の記憶があることから話始めた。

一度死んだと思ったらいつの間にか赤ん坊になっていた。

亜空間を作る能力は本当に生まれ付き持っていたがどんな原理かは調べてもわからなかった。

何故神の血が流れているのかは本当に分からない。

前世の世界ではGSなどと言う職業は無く、平行世界に転生してしまっただけでは無いかと考えている。

説明した内容は大体こんなところだ、確信に関わる事は言わず信じ

られる事では無い

かと言つて、完全な嘘とは思えない

そんな説明をしたおかげで小竜姫は相当悩んでいた。

もちろん、この世界が前世では漫画であったとか、私の肉体は英雄のギルガメッシュの物である等といった事は伝えていない。前者は当然だし後者にしても湯水のように宝具を持っているなど神様と言えど……いや、むしろ神様だからこそ、簡単に伝える訳にはいかないからな。

「（神殺しの武器を無数に持つてるなんて知れたらかなり面倒だからな、

そのせいで狙われたりでもしたら最悪だし。」

キリストの処刑に使ったロンギニスの槍など代表的な物から日本の神様を切った刀など、無いものなぞ無いと断言出来る程なのだ。黙っているのが得策だろう。

「うん……いろいろと気になる事もありますですが唐巢さんの知り合いと言う事もありますし、ひとまずは信じましょう。」

意外とアツサリ信じると言われて驚いた

おそらく我は今、目を見開いてキョトンとした表情になっているだ

ろつ。

「そんなアツサリ信じていいんですか？

自分で言うのも何ですが相当嘘臭い説明だったと思うんですが。」

「私とて竜神のはしくれです、話をした相手が善か悪かの違いくらい分かります。」

それに、貴方からは邪神の気配はしません。」

「そう言う物なのですか？」

「そう言う物なのです。」

何か危機感持つて損したかも

いや、そんなことは無い。

お人好しな小竜姫だからこそ、この程度ですんだのだ。

これからも気を付けて行かないとな。

王と竜神（後書き）

今回は小竜姫に半分正体ばれるの巻でした。

結局こんな話でしたが実を言うと最初のプロットの段階では修業を受ける予定でした。

それがどうなつてこんな話になつてしまったのか疑問でなりません。

結局は行き当たりばつたりに書いてるのが原因ですが。

唐突ですが、今回から後書き部分で

この黄金のGSを作る以前の作品アイディア（ポツネタとも言つ）を入れて見たいと思います。

もしかしたら書くかも知れません。

ポツネタその一

ギルガメッシュin戦国ランス

ランスとギル、互いに唯我独尊どうしなので面白いかと考えて見た

のですが。
ランスシリーズは二次でしか知らないので断念してボツになりました。

「ガハハハハ、死ねい金ぴか！ランスアタック」

「貴様ごときが英雄だと？恥を知れ下郎！エヌマ・エリシュ」

・・・・・・・・・・・・・・・・うん、無いな。

王と猫と・・・（前書き）

最近ゴッドイーターのバレット作成にはまってストーリー進行がなかなか進まない庶民です（挨拶）

今回初めてアクセス解析を見るとPVが7万を越えていました（ガクガク）

まさかこんな作品を此処まで大勢の方に見ていただけるとは・・・感想も少しづつですが増えて行き作者のモチベーションは上がる一方ですよ！

・・・しかし、せっかくギルガメッシュのチートボディだと言うのになかなか無双出来ないのは一種のジレンマに感じます。

早く進めたい！でも性急に話を進めたら内容が薄くなってしまう！二次創作とはかくも難しい物ですね。

次回からはようやく原作に絡めそうですが今回は（も？）それほど話は進みません。

もう少し文を長くした方が良いのかなあ。

王と猫と・・・

妙神山を訪ねて早一週間、我は現在、執事が運転する車に乗って唐巢神父の教会に向かっている。

「ねえご主人マスターこの車何処に向かっているんですか？」

訂正、我“達”は車に乗って移動している。

「マスターじゃ無い、雇い主と呼べ。」

私の隣に座り、

今質問してきた黒髪の少女・・・もとい少女のような少年が今回、教会に向かっている原因だ・・・

濡れ羽のような漆黒の髪をセミロング程度に切り揃え、猫を思わせるパツチリと開いた同色の瞳、少女と見間違える程の可憐な顔立ちと華奢な白い肌

・・・そしてショートパンツから伸びている二本の尾と髪から出ている猫科の耳

そう、あのレッドキャップが大発生していた森で助けた猫又が人に変化した姿だ。

何故コイツが私の事を主人・・・もとい雇い主と呼んでいるのか？その理由は三日前まで遡る事になる・・・

三日前

「はあ まったく、何でこんな町外れにあるのかな我の事務所は」

その日は仕事も無かったので普通に高校に行き何事も無く事務所に帰り玄関に着いた時に“ある物”が視界に写った

“ニャーニャー”

「拾ってください」

と書かれた小さな段ボールに体をギュウギュウに詰めてニャーニャー鳴いている黒猫だった。

「なにしてんのお前？」

その時、我は心底呆れた表情をしていたに違いない。

「ニャーニャー あんぐできればそんな冷たい目で見ないで欲しいのですが……………」

我の視線に耐えきれ無かったのか鳴き声を出すのを止めて流暢な人語で話しかけて来た猫又であった。

「……………要するに、我に飼って欲しいと？」

「まあ、要約するとそう言う事になります。」

玄関前で話すのも何なので、とりあえず家にかけて話を聞いたのだが……

曰く、あの森での出来事を解決する私の姿を見て、自分の主人になつて欲しいと言う事だった。

森での私の姿を狂信者の様に嬉々と語る様子を見て少し引いてしまったが。

曰く、神が降りて来たかの様に神秘的な光景だった やら

この世に貴方の様な方が存在していたなんて感動です やら

貴方に出会えた事には幾ら神に感謝してもしたりません やら

聞いている当人の我にとってはむず痒いを通り越して精神的にとても痛い程に私の事を美化して語るのだ……引いてしまつても仕方ないと思うのだが。

「（原因はおそらくカリスマAのせいか？）」

ギルガメツシュのスキルのひとつ

「カリスマA」

簡単に言つると呪い並みに他者を惹き付けると言う事だが……

「（と言つても、普通此処までなるか？）」

琴紅はまだ知らなかった、自分がギルガメツシュの肉体とは関係なく、横島同様妖怪変化に好かれやすい体質だと言つことを……要するにカリスマA&mp;横島体質で倍率ドン！で妖怪や霊などに好かれるのだが、生憎にも今までは合つた妖怪や霊はほとんどが見敵必殺対象だったので未だにその事に琴紅は気付いていないのだ。

「（　　）しかし、考え様によっては良い機会か？」

実は琴紅は最近、評判が上がりがり仕事が増えて来たので、兼ねてから従業員を一人か二人位雇おうかと考えていた。

そこに来てこの猫又が現れたため琴紅は丁度良かったかと思っていたる。

「（ひとまず面接でもしてみるか）　　例えば、我がお前を飼

う・・・または雇うとする。

その場合、お前は何か出来るんだ？」

「えっ!？え　と・・・掃除・・・位なら・・・・・・・・あつ

！猫の姿になって癒しを与えます！はい！」

「・・」

駄目だコイツ

そう思ってしまった

「・・・・・・・・駄目だコイツ」

「はっ!!」

つい口に出してしまった。

「・・・・・・・・まあ良い、仕事に付いては追々教えて行くか、」

「　　えっ!？じゃあ　　」

「その内従業員を雇おうと思ってたんだが、まあ素人の人間よりも妖怪の方が幾らかましだろう。」

「……まあ月給は暫くは百から二百と言った所だろうな。」
ちなみに単位は万である。

「は、はいッ！精一杯頑張りますご主人様」

「ご　　ッ！？その呼び方は止める、我には男にご主人様呼びわりされて喜ぶ性癖は無い。」

「はいッ！ではマスターと！」

「根本的に変わって無い！せめて雇い主と呼べオーナーと！」

「はいッ！オーナー！」

と言う事が有ったのだ……

まあ今の所は簡単な書類整備等をやらせているが

掃除や片付け等は週一に家政婦メイドがしてくれるので問題は無い。

そうそう、忘れていた。

この猫又の名前は

“アーク”

ただの猫だった時の飼い主が呼んでいた名前は何百年と生きている内に忘れたらしく我が付けた名前だ。

名前を忘れる程生きているくせに何故子供の姿で性格もこん

なんなんだ？疑問が尽きないなコイツは……………

「坊っちゃん、着きましたぞ。」

「^{アイク}コイツの事を考えていると運転している高齢の執事から到着を伝えられた

「む　悪いな、ありがとう爺

……ただ、いい加減に坊っちゃんは止めてくれ。」

「ホッホッホ、お家を継ぐまでは爺にとっては坊っちゃんは坊っちゃんです。」

言って無かったが帝督家は六道家に匹敵する日本有数の良家であるので長男の我はその跡取り最有力候補であるのだ。

「だから、何時も言ってるけど、家は神流^{かんな}が亮次^{りょうじ}が継げば良いだろ。我は自由にGSをしたいんだけど……」

神流とは私の二つ下の妹であり亮次は三つ下の弟だ。

どちらも優秀なので我なんかよりも跡取りにふさわしいと思っているのだが。

「それでは爺にとっては坊っちゃんは一生坊っちゃんと言う事ですね。」

「そうなるのかよ……………」
「やっぱり物心つく（普通の赤ん坊の）前程の年から世話を見てくれ

ている爺には口では一生勝てないだろうな。

sideアーク

僕は猫又のアーク、

ご主人様が付けてくれた名前でもってても気に入ってるんだ。

あつ、ご主人様って呼んだらご主人様怒るから内緒にしててね。

僕は今、ご主人様と一緒に黒くて長い車（リムジンって言うんだって）に乗って何処かに向かっている。

それと車の中ではご主人様と肩が触れる位すぐ隣で座っているのでドキドキが止まらないのでとっても困ってる。

本当はご主人様にこんな感情は持つてはいけない事は分かっている。

そもそも、性別や歳の差以前に種族が違うんだ、こんな感情を持つてもご主人様には決して伝わらないだろう。

でも良いんだ、こうしてご主人様のすぐ傍にいられるだけでも僕は幸せなんだから……

「アークちよつとこっち向け」

そう思っていると突然ご主人様が話しかけて来たので僕は心が読まれたのかとドキドキしながら顔を向ける

「何ですか？オーナー」

すぐ近くにご主人様の顔があるので心臓がずっとドキドキしている。

「（顔、赤くなって無いかな）」
僕はちよつと不安になりながらも真剣な顔をしているご主人様の赤い目を見る。

「アーク、俺は不器用な男だから回りくどい言い方はしない」

いつになく真剣なご主人様を見て緊張してしまう僕の手をご主人様が握ってくれた。

そしてご主人様は深呼吸をする様に大きく息を吸うと

「好きだあー」

！！お前が欲しいー

！！」

大声でそう言ってくれた。

「う　嬉しいですご主人様あ」

僕は泣きじゃくりながらもご主人様に抱き着いた。

ご主人様はそんな僕を優しく抱きしめてくれた。

幸せですご主人様あ

「えへへムニヤムニヤ　はっ！？・・・・・・・・夢か・・・・・・・・」

惜しかった、もう少し長く眠っていればいろいろと出来たのに

「夢魔でもあるくせに夢を見るんだな、
と言うかその顔を見るとどんな夢を見たのか非常に気になる所だが
何か聞くと怖いから聞かないで置くぞ……それと目的地に
着いたからさっさと降りろ。」

「はい」

現実のご主人様はやっぱり夢みたいに愛を叫んでくれないよね。
帰ったらもう一度あの夢の続きを見れますように。

それにしても、この教会の神父さん子供でもいるのかな？
なんだか二人位の泣き声が聞こえるけど……

王と猫と・・・（後書き）

遂に登場しました！

本作ヒロイン候補（嘘）アーク君！（妄想癖有り）

登場させて見ると意外と書きやすい気がしないでも無いですね。

それから琴紅に弟妹がいる事が発覚！

ぶっちゃけ後付け設定なのでいつ登場するかは分かりませんが・

・・・今後もたまにオリキャラが出ると思われますがなるべく作者を見捨てないでください。

感想お待ちしております。

ボツネタその二

遊戯王GXインオリキャラ fateキャラのオリ力持ち

「俺はフィールド魔法【固有結界・無限の剣製】を発動！」
アンリミットド・ブレイド・ワークス

翔「また初めてみるカードッス！」

「【無限の剣製】は自分の場にエミヤシロウと名の付くモンスターがフィールドに存在するときのみ発動出来る。このカードはワンターンに一度、自分の場に出ている装備カードの数だけ、相手の場のカードを墓地に送る事が出来る！」

十代「何っ!？」

「俺の場の装備カードは二枚！よって、お前の場のワイルドマン、フェザーマンを墓地に送る！」

「このカードの効果を発動したターン俺は攻撃する事は出来ない。カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

どう考えても制限や禁止カードになること確定。

そしてfateキャラ全てカードにして効果を考えるのが大変過ぎるので断念

ボツに

（それにGX自体も異世界に飛ばされた時点で見るのを止めてしまったのでこれが一番の理由）

笛吹の悪魔（前書き）

申し訳ありません時間かかり過ぎました（土下座

その上に話はあまり進んで無い！

こんな駄目作者は死んだ方がいいのかと自問自答を

すみません、此処まで言うのと逆にうつつとうしいですね。

こんなに遅れた理由は部活で大会があり、横浜まで行ってたのとモチベーションが上がらなかつたのが主な理由です。

まあ中華街の料理は美味しかったですけど。

そんな作者ですが明後日辺りからGW中ずつと合宿があるため、また暫くは更新出来ないと予想されます。

楽しみにしている方には申し訳ありませんが次の更新はまた暫くお待ちください。

P S

その内やり方が分かったら美術部の知り合いにアークの絵を書いて貰ってUPしようかと考えています。

笛吹の悪魔

「こ、これは……………」

教会の方で妙な妖気の残り香を感じ、
急いで扉を開けた我オレが見たのは……………

「びえええ　　っ!!」

「うぐっうぐっ

うわ　　んっ!!」

泣きじゃくってる唐巢神父似の子供と金髪の子供だった。

教会内はあちこちがボロボロで破れた破魔札も床に落ちている。

「うわぁ酷い……………この匂い、恐らくは悪魔の仕業ですよオ
ーナー。」

「分かるのか？」

「はい

妖怪には妖怪の、幽霊には幽霊の、そして悪魔には悪魔の、
……………独特な匂いがあるんです。」

「悪魔か……………」

十中八九この二人は唐巢神父と原作キャラのピエトロ・ド・ブラド
ーことピートであるっ。

「唐巢神父、私の事が分かりますか？
いったい何が起こったのですか!？」

「うぐっ、ていとくん、パイパーがパイパーがみかみくんをグス
ッ」

そこまで言っただけで唐巢神父(子)は泣き出し会話にならなくなっ
た。

「(記憶が完全に消えてる訳じゃなさそうだけど………コレ
じゃあどうしようもないな。) アーク!」

「はうっ!？は、はい!なんででしょうかオーナー!？」
突然呼びつけたからか一瞬奇声を上げて驚いていたが気にしてる暇
は無い

「初仕事だ。」

「私は2〜3日程、コレの元凶を叩きに出掛けるから。
その間、この二人の世話を頼む。」

「え!？えと、えっと」

「返事は“はい”か“yes”だっ!」

「はわわわわ、はいいい!了解しましたあ!」

「よしっ!」

爺、いますぐへりを用意しろ!

私の恩人をこんな目に合わせた腐れ悪魔を狩りに行くぞ。」

「かしこまりました坊っちゃん。」

直ぐ様、此方に向かわせます。」

そう言って爺は私の命令を果たす為に何処かに電話を掛けた。

おそらく数分もしない内にへりは到着するだろう。

「……………原作自体に関わる気はあんまり無かったけど、

やっぱり、世話になった人達がこんな目に合って冷静でいられる程、我は人間が出来ちゃねえんだよ！」

その後、爺が呼んだへりに乗り込んだ我はパイロットにN県に向かう様に言い、我は爺に携帯で連絡をした。

「爺、続けて悪いが今から“バブルランド遊園地”がある場所を調べてくれ。」

《“バブルランド遊園地” ですか？あの完成前に工事が中止になった？》

「ああ、あの馬鹿みたいに金掛けた挙げて急に建設中止になったそれだ。」

聞いた話では、奴は其所を拠点にしているらしい。」

《なるほど……………かしこまりました、直ぐに調べます故しばらくお待ちになってくださいませ。》

「ああ、だが伝えるのは明日で充分だからしつかり調べてくれ。

我は今日は最寄りのホテルで除霊の準備を整えるからな。」

《了解しました。

では明日の朝に連絡を致します。

……くれぐれも、怪我などが無いようにご注意くださいませ。》

「ああ、分かっている。

じゃあな、一端切るから任せたぞ。」

Piツと言う機械音を鳴らして通話を切り、我は前世で読んだGSの原作を思い出していた。

「（大丈夫、たしかパイパー戦では1日はホテルに泊まっていた筈だから余裕はある。

場所が分かれば今すぐにでもパイパーの本体を見つけて倒すのも一つの手ではあるが……その場合、歳を吸収した風船がどうなるか分からないからな。

流石にそんな序盤の細部までは覚えて無いし）」

万が一　　本当に万が一、パイパーを倒してから風船を金の針で割る時間が空きすぎると大人に戻れなくなるなんて設定があったら笑い話にもならないからな。

それならまだ、原作メンバーが戦闘している時に横から入り込んで援護したほうが確実だしな。

結局この日はN県のホテルに泊まり明日に備える事にした

のだが。

「なんでお前は此処にいる?」

「やっぱりオーナーが心配で心配で、いても立ってもいられなかつたんです。」

ベットのの上にチヨコンと座り涙目& amp ;上目使いで此方を見てくるアークに、ため息を吐くしかない我であった。

「 っ て

そうじゃない!

我はへりで此処まで来たんだぞ!

どうやって我よりも先に、しかも私の泊まる部屋に入ってたんだ!」

そう、コイツは我がこの部屋の鍵を貰って入って来た時には既にこの部屋にいたのだ。

「 (コイツ、まさか未来予知も出来るのか?) 」

「愛の力です!」

「んな訳あるかあ!」ふざけた冗談に全力で突っ込んでやった。

何かもう疲れたからさっさと寝よう。

うん、そうするのが一番だ。

「 はあ、もう良い明日に備えてさっさと寝るぞ。」

早く入って来い。」

我は一つしかないベツトに潜りながらそう言った。

「えう！？そ、そそそそそれはまだ！ここここ心の準備が！！」
何をきよどつてんだこいつ。」

「我は一人部屋しか頼んでないからベツトは一つしかないんだ。少し狭くなるが流石に床で寝かせる訳には行かないだろ。」

「う、ううううでもお」

もしかしてこいつ……………」

ベツトが狭くなることを気にしてるのか？

「それなら元猫の姿に戻れば良いだろ。
それならそれほど場所も取らないし。」

「ふえ？……………あつ……………アハハハハ
そ、そうですよね。」

(ボソツ) そんな甘い展開にはなりませんよね。」

「ん？何か言つたか？」

「い！いえ、何にも。
……………そ、それじゃあ、お邪魔します。」

ようやくベツトに潜り込んで来たアーク(猫バージョン)を体の横に寝かせて我も瞼を閉じた。

明日から、とうとう原作介入か……………

アークside

「ん、ムウ……………」

窓から朝日が差し込み、僕を眠りから覚ました。

昨日はなかなか寝付け無かったなあ。

だって直ぐ隣ではご主人様が無防備に寝てるんだもん。
夜の間はずっとドキドキしてて眠れないのは当然だった。

あれ？そういえばご主人様は？

もう起きたのだろうか目の前には居なく周りを見回して見ると……………
……………いた。

なにやら扉の方で揉めているようだ。

「だから、なんだこの朝食は？と聞いているんだ！」

「い、いえ

そうおっしやられましても……………

当ホテルでは朝食は和食と言う事になっているのですが。」

なにやらご主人様が凄い剣幕で怒っている。

食事に付いてみたいけど何があったんだろう？

ご主人様の昨日の朝食は和食だったと思うけど……………

「そんな問題では無い！

いいか！俺の要求はただ一つ！」

ご主人様の真剣な表情にホテルのスタッフさんも顔を引き締め
ている。

「要求……………とは？」

重苦しい雰囲気の中スタッフがご主人様に聞いた。

そしてご主人様は右手の指でスタッフさんを指しながら

「コッペパンを要求する！！」

等と言うことをのたまいやがった。

「……………こ……………コッペ？」

スタッフが困惑している、

そりゃそうだろ、僕も訳が分からない。

「そうだ！コッペパンだ！出せ！さもなければ射殺する！」

そう言うてご主人様はあの森での様に背後の空間から次々と武器を
射出していく……………

ああ、分かった……………こう言うのって、大体が……………

「夢」

「ん？起きたか？」

目が覚めると何時も通りのご主人様がいた。

「はあ、夢で良かったあ。」

「やたらと魔されてたけど大丈夫か？」

無理そうなら今日は付いて来なくても良いぞ。」

「いえ、大丈夫です。」

ちよつと昨日と続いて現実ではオーナーが絶対言わなそうな事を夢で言ってたので驚いてただけです。」

「そ、そうか。（夢の中でどんな事言ってたんだ我）」

「突然「コツペパンを要求する」なんて言い出したので夢って分かったんですけどね。」

「（それなんてフルメタル・パック？）」

て言っつか声優ネタか？

何故コイツが知っている？

夢を通じて私の過去でも見たのか？

.....

「まあ良い、準備が出来たのなら行くぞ。」

モタモタしていると間に合わないかもしれないからな。

どうでもいい事だが、もし我がパイパーの笛を聞いたらどうなるんだろっ？

子ギル状態になる位なら若返りの薬を何度か試してるから問題無いが……まあとってもいいな。

笛吹の悪魔（後書き）

イマイチ琴紅のキャラが掴めない作者です。

書いてて思ったのですが、ナニコイツ面倒くさい。

もう居場所分かってんならさっさと倒せよと。

まあ万全を期すために必死なんでしょうがないんですけれど。

話は変わりますが、

琴紅に使って欲しいオリジナル宝具等アイデアがございましたら感想版に是非ともお書きください！

よさそうな物がありましたら本文中で使ってみたいと思いますので。

すみません、厚かましかったですね（笑）

こういう読者のアイデアを聞くのに憧れてたんです（苦笑）

次回こそ、次回こそは主人公達を登場させます！

恒例（？）のボツネタタイム

植木の法則 in 上条当麻

「僕の夢の為に、人間も天界人も地獄人も全て滅ぼすんだ。」

「ふざけんじゃねえ！お前のそんな身勝手な願いの為に前以外の全部を滅ぼして良いと思ってるのか！！」

「君に僕の夢が止められるのかい？」

「いいぜ、お前が自分の夢の為に全て滅ぼすって言うんなら、

まずは、そのふざけた夢をぶち壊す！」

上条さんは能力を与える事が出来なさそうですね。

与えた瞬間右手で消しそうですし（笑）

結構真剣に考えたんですけどね、神器は右手で消せるのか？的な事も。

まあ能力なら完璧キャンセルしそうですけど（笑）

（その場合、電気を砂糖に帰るあの的は天敵っぽいけど……）

ただ植木はあまり需要が無さそうなので、涙ながらにボツになりました。

悪魔の決着（前書き）

遅くなつてすいません（土下座）

言い訳をすると原作を知り合いに貸していたためなかなかモチベーションが上がらずグダグダと引き伸ばしてしまいました。

今後こんな駄目作者ですが見捨てないでやってください。

悪魔の決着

建設途中で放置され、廃れたバブルランド遊園地

人の気配など無いに等しいこの場所で場違いな笛の音が鳴り響いていた。

《見るがいい！おいらの真の力を！！》

遊園地の一角にて、巨大な鼠の額から半透明の体のピエロが金色の針タクトで指揮を取り。
笛を鳴らすのは指揮者の前方に並ぶ小人のピエロ達

そして、それに相対するは……………

「な…なんだ!？」

「ッ! まずい! カバンから結界を出して! 早く!!」

一組の男女と幽霊の少女

《~~~~》

《ハイッ!》

演奏が終了した刹那

この場から半径数十kmに到るまでに、力の波動が日本を襲った。

同時刻遊園地入口付近

「オーナー、大丈夫なんですか？いつもの鎧着なくて……」
「あれは目立つし趣味に合わないからな、お前が考えてる程、毎回着ている訳じゃないんだよ。」

「でもでも、さっきから中の方から強い妖気を感じますよ
あと、なんだか笛みたいな音が。」

「心配し過ぎだと思っが……ん？笛の……音？……
……マスター……！……しまっぬわぁ！？」
「ま！ご主人！？」

耐魔性の護符マジックシールドを装備するのをすっかり忘れた琴紅がすっかり喰らっていたのだった。

「子供になってない！？助かった？」

頭を抱えてふせていたバンダナを身につけた男
横島は起き上がりながら安堵を漏らした。

「……とりあえずはね。危ないとこだったわ！」

それにしても何てパワー……人間を子供にするなんてやるのがセコい分、影響範囲は恐ろしく
広い！」

額に幾つかの汗を浮かばせながらボディコンを着た女
美神は呟いた。

《フン！セコくて悪かったね。》

だが人間社会の機能を完全に停止するには充分だよ。

あとは何をしようがおいらの意のままさ！》

巨大な鼠の額から上半身を出しているピエロ
パイパーはそう答えた。

確かにパイパーの言うことは概ね正しい。

現に効果範囲に入っていた都市は大パニックに陥っているのだ。

これと同じ事を繰り返し返せばパイパーの脅威になるものは居なくなるのだから、これ以上の効果は無いだらう。

《さあ、そろそろ止めだ！》

かろうじて今のは防いだが次はそうはいくまい！

くらえ！！》

再び悪魔はタクトを振り恐怖の演奏を開始する。

「どっ、どっするんです！？」

「簡易結界はもうないし、ちゃんとしたのを作ってるヒマもないわ
！」

「……………と……言うことは？」

「お手上げよ！もうどうしようも無いわね。」

その言葉を聞いて横島は顔を真っ青に染める

「……………ツ！イヤやアアアア子供になんぞなりとうない
いいいい！！！」

「うるさいわね！！私だってまた子供に戻るなんてイヤよっ！」

「こうなったら！美神サアアン子供になるまえに俺を大人の男にい
グビヤ！！！」

「己はこんな状況でそれかあ！！！」

乱心した横島が（いつも通り）上半身裸になり美神に飛び込んで行
くがアツサリ撃沈される。

くくくく

そんな事をしている内に演奏は終了間際になっていた。

《ホーホツホツホツおいらの勝ちだねい》

あとはパイパーがトリガーを引くだけで決着はつく

「ここまでか！」

遂に美神までもが敗北を覚悟した
が！

……の鎖よ

《 えっ？ 》

幽霊の少女 おキ又は耳に届いた僅かな声に振り向く。

刹那

《 なっ、なにいいいいいい！！？ 》

パイパーの本体である化け鼠が何処からともなく現れた無数の鎖によつて縛られた。

《 なんだいこの鎖は！？ いったい何処から！？ 》

「 (……………チャンス！) 」

突然の出来事に混乱するパイパーを見て、経験によりいち早く自らの優位に気付いた美神はパイパーに特攻をかける。

「パイパー！ 覚悟！！」

《 グっ！ 》

美神が繰り出してくる神通棍をパイパーはかるうじて動く右手の金の針で受け止めた。

ギイイイン

と金属同士を打ち付ける様な音が響く
それによって、チビパイパー達が本来の姿である鼠に変わる。

《このアマ！この程度の鎖でおいらを止められると思うなよ。》
神通棍を受け止めつつパイパーは自身を縛る戒めを強引に引き千切るうとする。

神をも縛る鎖であっても悪魔であるパイパーにはただの頑丈な鎖でしかないのだ。
破られるのは時間の問題である。

だが、それは

《　　ッグハア！！》

その鎖の持ち主が何もしなければの話である。

パイパー本体の体を

槍が

剣が

弓が

次々に背後から一本つつ刺し貫いて行く

「何処の誰だか知らないけど、ナイスだわ。

ハア！」

《ぐっ…》

後ろからの攻撃に気を取られたパイパーに美神は容赦なく神通棍を

突き刺す。

「あなたは最低のクソ野郎よパイパー！
強い相手は子供にしないと殺せない。
しかも本体を隠さないとそれすらもできないんだわ！

クソ野郎にふさわしい場所はひとつだけよ！！
今、そこへ送ってあげるわ！！」

一線

霊気を込められ過剰分が雷のような音をたてて光る神通棍がパイパーの右腕を切り落とす。

《ギヤアアアツ》

あまりの苦痛に必死に逃げ出そうとするパイパーだが体を縛る鎖によつて逃げる事すら出来ない。

そして

「パイパー！！」

右腕と共に落とした金の針を槍のように構えた美神の刺突がパイパーを捉えた。

《ギヤアアアアアアアアアア

ツ》

「終わった……かな？」

その様子を眺める二つの影があった。

「その様ですね、

でもオーナー大丈夫なんですか？

子供の姿であんなの使って……」

「大丈夫だよ……本当、大人の僕ってどうしてこう詰めが甘いんだろうね。

耐魔力が無かったら宝具も使えない年齢までになってたよ。」

「（まあ、何はともあれパイパー編は無事に終了かな。

僕の年齢の風船は美神さんが割ってくれるだろうし………まだ接触するタイミングでも無いな）帰るよアーク。」

「えっ、いいんですかオーナー？」

「まだ時期じゃ無かった。

それだけだよ。」

大人の僕は今日彼女たちと接触するつもりだったらしいけど………それじゃあつまないよ。

せつかくこんな能力を持つてるんだから、もっとこの世界を楽しまないとね。

少年は笑う

この愉快な世界を楽しむかのように
無邪気に笑い続けた。

悪魔の決着（後書き）

パイパー編終了

主人公うつかりにより空気

結局原作メンバーとの接触無し

……………どうしてこうなったし

ナニしてんだ俺、このタイミング逃して！

いったい何時原作主人公と交流するんだよ！？

取り乱してしまいました失礼しました

正直ほとんど原作通りなので主人公の援護いらなかったかな？と書き終えてから思ってしまった自分は作者失格でしょうか？

ひとまず次回には琴紅の学校生活の話の一つ挟んでから六巻の内容はスツ飛ばして天龍童子編に入る予定です。

この辺りでいい加減に原作主人公達と接触させます。

ええ！絶対！きつと！たぶん！

恒例のボツネタタイム

言峰綺礼inとある魔術の禁書目録

「テメエなにもンだアそのガキをどオするきだ。」

「いやなに、この少女を巧く使えば世界中の妹達とやらが思いのままになると聞いてないても立ってもいられなくなったのだよ白い少年。」

「はッようするに幼女誘拐ですかア。」

最近の神父様はいイ趣味をしていらッしやることで。」

「ああ、このような少女一人で世界中を混沌の渦に巻き込めるのだ。」

これほど、甘美な誘惑は無い。」

「はッ、言ッてるド三流の悪党が」

一流の悪党ッてもンを見せてやるよ・・・だからさッさとそのガキをかえしやがれ!!」

「ふっ、化けの皮が剥がれたな少年、」

お前を叩きのめした後にこの少女が苦しむ姿を見せれば、さぞかし君は良き顔を見せてくれるのであるうな。」

プッ

「ああそうかい、ンじゃさッさと死にやがれクソ神父!!」

とある神父の麻婆豆腐

公開予定（ある訳無い）

一方通行の喋り方めんどっ!!!

言峰のキャラムズ!

という事でボツです。

ツンデレお嬢様とヨーロッパの魔王（前書き）

今回は結構速めに投稿です。

しかし、これからテスト期間と部活の大会まで数週間と言っ畏。
今年最後の夏なので予選は絶対に突破したい物ですね。

よって次の更新が遅れる事は確定的に明らか（オiiiiiiiiii）

さて、今回はタイトルで分かる通り、あの爺さんが登場です！

ちなみにツンデレお嬢様はオリキャラなのでご注意を。

ツンデレお嬢様とヨーロッパの魔王

我オレは学生である。

たとえば自分の事務所を持ち、一つの仕事で何十〜何百万の収入が有ろうが学生である。

我自身は本来高校に通うつもりは無かったのだ。

何せ高校は前世で通っていたのだ。

正直、小中学校は苦痛意外の何物でも無かった。

そんな我がわざわざ高校に通う理由は一つ………面子の為だ。

継ぐ気が無くても我は帝督家の御曹司だ。

中卒では自分だけで無く家族 特に両親 の顔に泥を塗りかねない。

この世界に転生して直後、急激に大きくなっていく会社に苦勞していた筈なのに我に存分に愛情を注いでくれた両親だ。

こんな我が忸で恥をかかせる訳にはいかない。

と言う訳で今年で18になる我は現在三年生として高校に通っている。

流石にその辺の公立に通っている訳じゃあ無いし高校三年にもなれば小中学生の独特なノリも少ない為にそれほど苦痛では無いし楽しくもある。

しかし、この高校はいわゆる上流階級の人間が通う高校だ。

つまり、学生の身だか幾つかの派閥に別れていると言う前世では考えられない状況であったので入学直後は随分戸惑ったのも良い思い出だ………

「 にさん とべにさん 琴紅さん!! 」

「 うお!! 」

思ったより深く思考していた様で目の前で私の机に両手を付いて此方呼びかける声に気付かなかった。

「 聞いていらっしやるの！ 琴紅さん!! 」

「 すまない、少し考え事をしていた。 」

「 まったく！ では私わたくしの話は聞いてなかったのですわね!! 」

この如何にもお嬢様な口調の女学生はカレン・フォーゲルハツト

外国特有の美しい顔立ちに金髪碧眼と高い身長（本人は気にしてる）が特徴の留学生だ。

容姿端麗・才色兼備を絵に書いた様な人物で当然の様に成績はトップクラス、運動神経も抜群、オマケに実家は代々続く由緒正しい家柄と

比の打ち所が無いパーフェクトガール の筈なのだが……

「 そもそも琴紅さんは普段から注意力が散漫ですわ！ せっかく！ わざわざ私が声を掛けたと言うのに！ そのような態度はレディーに対して失礼ではないのかしら!! 」

コレである……

実は以前、学校でとある（オカルト）トラブルが発生し、

我が解決した事があつたのだが………それ以来、カレンはやたらに我に絡む様になってしまったのだ。

「それで？何の様だ？」

「それに貴方は何時も　　つてそうでした、忘れる所でしたわ。」

無視していると何時までも我への不満を延々と続ける為、さっさと用件を聞くのが先決だ

「貴方、また暫く休んでいましたからね。」

わ　　私がわざわざノートを見せてあげようと思いましたの。」

「ん　　？そうなのか？それはありがたいな、今日は龍治が休んでいるから誰に借りるか迷つてたんだ………でも珍しいな、カレンがそんな事を言うなんて。」

「かつ　　勘違いしないでください！」

私はあくまでもライバルとして貴方にこんな事で差を付けたく無いだけですわ！

けけけ決して、特別な意味があるわけじゃありませんわよ……！」

「そ　　そうか………」

我はカレンの腰まで届くロングストレートの髪を見ながらこう思った。

何でコイツは髪型が縦ロールじゃ無いんだろうか。

別にそれがどうしたと言われればそれまでだが、この思いはクラスメート全員一致しているのだ。

以前、気になってつい聞いてしまったのだがその時は

「そ その髪型の方が好みなのかしら？」

と言う要領の得ない答えを頂いた。

ちなみに今日休んでいる龍治と言うのは私の数少ない男友達でありGS業でちよくちよく休む我によく授業ノートを見せてくれるありがたい親友だ。

龍治と交友関係になったのもさつき言ったトラブルが原因なのだが……それはまた今度にしよう。

放課後

特筆する事もなく学校は終わり、我は今アーク（何故か校門で待っていた）と共にある場所へと向かっている。

「こっちは事務所の方じゃないですけど、何処に向かっているんですか？」

「ちょっとした知り合いの所だよ……それと今は良いけど人前では猫の姿で喋るなよ。」

「はい、気を付けます。」

そうして歩くこと約二十分

『幸福荘』と書かれた板が掛けられているアパートが見えてきた

「おんや、琴紅さん」

そのアパートの前で箒を持っていたお婆さんがこちらに気付き話しかけてきた

「こんにちは是大家さん、今日も元気そうで何よりです。」

「はっはっは、私もまだまだ若い者には負けませんよ。」

「そうですね、じゃあ少しお邪魔しますね。」

「はいはい、ゆっくりして行きなさい……………おや？あんな猫を飼い始めたのかい？」

アパートに入ろうとした我について来ようとしたアークを見て大家さんが我に尋ねた

「ええ、最近ね。」

「って、お前はここで待ってる。」

「アパートは動物禁止だ。」

何気について来ようとしたアーク（子猫バージョン）を大家さんに預けて今度こそ我は中に入ってしまった

「お〜い爺さん、居るか？我だ。」

「アパートのとある一室……………」

インターホンも無いたため我は扉をひたすらノックしながら呼びかける。

そうしていると中から扉が開き桃色の少女が出迎えてくれた

「いらっしやい・ませ、琴紅・さん。

ドクター・カオス・今・御手洗い・です。

どうぞ・お入り・ください。」

この一言一言区切る独特な喋り方をする少女の名前は“マリア”

桃色のショートカットの髪型に無機質な瞳、スレンダーな体型で無感情ながらも美しい顔立ちの少女だ。

しかし、驚くことなかれ

見た目は完全な人間の少女だが

その実、正体は魔法科学の粋をもっと造られた正真正銘の“ロボット”なのだ！

と言っても、精々体の各部に武器を仕込んでいて、普通の人間の数百倍程力が強いだけで

その他は普通の少し感情の薄いただの少女でしかないが（一般的にそれを“精々”とは言いません）

ちなみにこの前ロボットパンチを見せて貰った。

良いねロボットパンチ。

ドリル、目からビームに続いて漢おこしのロママンが詰まっているね。

それはともかく
閑話休題

「おお！坊主来ておったのか！」

そして、そのマリアの制作者こそ。

このズボンのチャックを上げながら登場した顔中皺だらけの……

・しかし、ガツシリとした大柄な体の老人

ヨーロッパの魔王ことドクター・カオスである。

「よう、三日振り。」

相変わらず千歳を越えてるとは思えない程元気そうだな。」

「フハハハハ

ワシは不死身じゃ！

その位は当たり前じゃわい。

のうマリア？」

「イエス、ドクター・カオス」

ん？我がこの二人と顔馴染みになっている理由？

一月ほど前から面識があったのだが今まで（作者の）描写不足で書かれていなかったただけだ（メタ発言自重）。

まあこの二人との出会いを三行に纏めると・・・・・・・・

.....

二人、家賃払わず。

雑刀持った大家に追われている。

我とバツタリ遭遇。

こんなもんだ。

その時に我が二人の家賃を立て替え、そのお礼にドクター・カオス

作の魔道具を譲って貰ったのが始まりで、
それ以来、たまに交流をしている。

「まっ、それにしたって我は運が良い。

日本の様な島国でカオスの爺さんとコネを持てるなんて思っ
ても見なかったよ。」

ぶっっちゃ嘘です。

コンタクトを取る機会を虎視眈々と狙ってました。

「ハッハッハ

そうじゃろそうじゃろ！

ワシもお前の様なスポンサーに会えるとはラッキーじゃったわい。」

「ハハハ、お互い幸運だったって事だな。

それで、例のものは完成したのか？」

「おう、材料費も研究費もお主からたっぷり貰っておるからな。

これで来月も家賃が払えそうじゃわい。

「……………マリア、机の上のトランクを持って来てくれ。」

「イエス、ドクター・カオス。」

マリアはそう答えて別の部屋に行った

「……………しかしカオスの爺さん。

もう少しマリアに服とか買ってやった方がいいんじゃないか？

何度か来てるがマリアが着てる服は今着てるあれと何時もの黒いコ

「トしか見たこと無いぞ。」

「むっ？ムムムムム……確かにお主の言うことも一理あるが……肝心のマリアが新しい服などを欲しがらないんじゃない。」

「うん……ソレばつかはしようがないか……マリア自身がオシャレに興味を持たないとどうにもならないしな……」

「恋でもすれば変わるんじゃないの？」

「口ポットだしなあ……結構難しいなあ。」

そういえば、惚れ薬騒動が切っ掛けでマリアは横島に惹かれて行くんだっけ？（この話ではまだ惚れ薬の話は起こっていません。）

……まあ、その辺も横島に期待かな？
いざとなったら我が焚き付ければ良い話だし。

良いね。

人の恋路は最高の酒の肴だ。

この後はカオスの爺さんと世間話をしたり窓からコッソリ侵入したアークを二人に紹介したり、頼んでいた‘物’も受け取ったりしたり、また新しい物の製作を依頼して事務所に帰った。

しかし、頼んでいた‘物’が少し少なかったな……
……まあ元々無理な注文だったからな、ここまで出来ただけでも
十分だろう。

そう思い、我はソレを【ゲートオブパピロン王の財宝】の中に仕舞った。

ツンデレお嬢様とヨーロッパの魔王（後書き）

カオス達との出会い話を書かなくてすいません。

正直いちいち書いていると

どうしても長文になって仕舞うので……

自分、大体が3000〜5000文字位を一話の目処にしている為にこんな感じになってしまっんですよ。

しかし、GSの原作を読み返すとアシュタロスや三人娘の強さが異常に見えてきました。

宝具バレを気にしてたら琴紅は絶対勝てなさそうだしね（笑）

恒例のボツネタコーナー（ドンドンパフパフ）

FATE ランサー in テイルズオブディステニー2

「ぶあかあなあああ!？」

貴様! その傷で何故生きている!？」

「ハッ

この程度でくたばれるんなら

俺は英雄なんぞになつてねえ。」

「英い雄うう？」

英雄だとおおお？

笑止！この世界の英雄はこのバルバドス様ただ一人よ！」

「ハン

不意打ちに人質、そんな事をしねえと満足に戦う事も出来ねえテメエの何処が英雄だ。

ああ、確かにテメエは強えよ………

だがな！

テメエのその斧には決定的に誇りが欠けている！！」

「ッ！？」

ほざいたな青二才があ！」

「ランサーさん！？」

「いいからさつさと行け！カイル！

テメエの手で未来を元通りにしてこい！」

「いいのかい？あいつ等を追わなくても？」

「ふん、俺も馬鹿ではない。貴様程の男が簡単に俺を行かせる訳がない。」

「ッハ

良いね良いね、脳みそも筋肉かと思っただが、意外と分かっているじやねえか。」

「 貴様なんぞに長々と時間をかけるのも面倒だ。
大技で一気に決めてやる！」

「 ふん、俺はギリギリの戦って奴がしたかったが、たま
にやあそついうのも悪くはねえか。

こいつ」

「 ジエノサイド ！」

「 【突^{ゲイ}し穿つ ！」

「 ブレイバアアアア！！！」

「 死^{ホルク}翔の槍 ！」

兄貴カツコイイよ兄貴。

書いていて思ったけどランサーとロニって中の人一緒？
どちらも兄貴^{イジラレ}キャラだから凄く気が合いそうだなあ。

………没にするのは惜しいかもしません。
もしかすると黄金のGS以外に

このネタを元に書くかも知れません。
.....むしろ誰がこの設定で作ってこないかなあ

竜神の依頼（前）（前書き）

私はテスト中なのになんかいたい何をしているんだろう？
と言っても相当短いので前後に別けます。

切りが悪くなりそうなので中編も出来るかも知れません。

.....それから、その内【とある魔術の
禁書目録】の新作を作る予定なので完成したら良ければ見てくださ
い。（と言ってもこっちの方がメインなので短編集みたいになる予
定ですが）

竜神の依頼（前）

ヒソヒソ

ザワザワ

ママーあの人達なんで着物なの？

しい！ケイちゃん見てはいけません。

「（なんでこんなことに）」

現在わたくし我帝督琴紅は街中にて注目の的となっている。

その原因は

「何故周りの人間は我らを見ているのかの左の？」

「うむ・・・完璧に人間に化けているし、まったく原因が分からん。」

「（ オーナー！周りの視線がとても痛いです。 ）」

「（ 言うな！我オレだって出来れば帰りたいんだ。 ）」

「（ じゃあせめて、猫の姿に ）」

「（ふざけるな従業員！？社長一人でこの視線に耐えろと言っのか！？お前も道連れだ！）」

「（そんなぁ 勘弁して下さいよぉ。）」

上の会話は全てアイコンタクトです。

さて

何故我がここまで目立っているのか今ので分かってくれたかと思うが詳しく説明しよう。

2 mに近い大男二人（しかも超そっくりな）が明らかに時代錯誤な格好で昔の城主等に乗せる籠の様なもの（名前は分からん）を担いで都会のど真ん中を堂々と歩いている………
・うん、映画の撮影でも無い限り相当目立つな。

ちなみに、この二人は鬼門

あの妙神山の修行

場の門であり門番である鬼が人の姿に化けた物だ。

この二人がいると言うことは、当然だが………

・

「帝督さん？まだ着かないのでしょうか？」

「地図を見た感じ、後十分もあれば着きますよ小竜姫様。」

妙神山の管理人

小竜姫がいると言うことだ。

何故こんな事になったか？

それは一時間前に遡る………

本日は休日の為、高校は休み。

特に部活動に所属している訳じゃ無いので、朝から事務所で書類の整理等を（アークにもやり方を教えつつ）していると

ピンポーン

気の抜けそうなインターホンの音が部屋に鳴り響いた。

「（客か？）アーク」

「はっい、

どちら様でしょうか？」

一言声を掛けるだけで我の意思を汲んだアークが玄関へと向かって行った

まあ、ひとまず切りのいい所までと思い書類を持ち上げた時

「ひっ！？ヒヤアアアアア！！」

玄関に行ったアークの叫び声に驚いてツッコけたせいで机に乗って

いた書類の束を床にブチマケテしまった。

「お！オーナー！オーナー！？オーナー！！？りゅ！りゅりゅりゅりゅ
りゅ
」

散らばった書類をボンヤリと見てみると、今度は叫び声を上げた本人が明らかにテンパった状態で部屋に飛び込んで来た。

「
落ち着け！呂律が回って無くて何を言いたいのかまったく分からん。」

「落ち着いてる場合じゃないんですよ！？
りゅりゅ竜神が竜神が来たんですよ！！！」

「
はっ？」

「お邪魔しますね、帝督さんの家はここで宜しいんでしょうか？」
アークが飛び込んで来たために開きっぱなしになっていた扉から妙
神山の小竜姫が顔を出した。

なんで？

「ハア、なるほど天竜童子様がねえ。」

「はい、私は下界には疎くて、どうしたらいいか。」

ひとまず小竜姫の神気に怯えたアークを落ち着け（元動物の為、その辺に敏感なのだ）

小竜姫の話聞いた所……どうやら、原作の天竜童子脱走事件のようだ。

本当は美神令子の所に真っ先に行くつもりだったらしいが、その道中に私の事務所があることを知り猫の手も借りたい状況の為に相談に来たらしい

「……理由は何にしても、これはチャンスかな？」

前回、子供の我が何を思ったのか原作主人公達に援護をするだけして顔も見せずに帰ってしまったが、

今回なら、極自然に美神令子とコンタクトを取れる。

別に原作介入がどうかではなく、各企業に顔の広い美神令子と繋がりを持つなら持つべきだと最近思ったからだ。（まあ、顔の広さと言う点では我も負けず劣らずだが）

琴紅は大企業の御曹司です。

「（ それに……）」

前回のパイパー戦、結果としては買っていたが、正直、子供の我が援護をしなかったら美神達は子供になり、敗北していたかも知れない。

「（ バタフライ効果って奴かな？）」

我が転生したことによる歪み……帝督家が急成長した事や、我が退治した悪霊達、こんな小さな歪みでも世界に思いもよらない変化が起きるかも知れない。

そう思うと原作では何とかなっていたなんて当てにならない。

もし、美神令子達に何か　例えば美神、横島のいずれかが思い怪我などを負う　あつたら後のアシユタロス事件解決に大きな支障をもたらしてしまう。

ならば、

主人公組とはなるべく速めにコンタクトを取った方が良い。そう決断した。

「OK、分かりました。」

どのくらい役に立つかわかりませんがお手伝いしますよ。」

「あ！ありがとうございます！」

と言う訳で

基本装備（神通棍・破魔札・吸魔札・見鬼君など）と先日カオスに作って貰った例のものを【ゲートオブパンドラ王の財宝】に仕舞い、美神令子の事務所まで向かうことになったのだ。

そして現在……

ヒソヒソ ザワザワ
モシモシ？ケイサツノカタデスカ？

「（今からでもキャンセル出来ないかなあ。）」

周りの視線にそろそろ耐えきれなくなって来た我であった。

竜神の依頼（前）（後書き）

予告通り天竜童子編開始です。

今回は中身が薄すぎるのでこれ位しか言えません（泣）

とりあえずボツネタコーナー

真・恋姫無双inリン・ヤオ（鋼の錬金術師）

「・・・・・・・・・・・・・・・・（つつん）」

「ん？どないしたん呂布ちゃん？そないな所にしゃがみこんで？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・これ」

「ん　どれどれ・・・って人が倒れとるやないかあ！？
いったいどないしたんあんた!？」

「は　　腹がへっタ」

異世界の皇子が戦乱の世へと呼び出された。

「いや、助かつた！危うくまた飢え死ぬ所だったヨ」

「呂布ちゃんとおなじ位食うなあ、あんた……うちの給料がほとんどペアやないか。」

「ウムそれはすまなかつた、その内なに力お礼をするヨ。シンの人間は受けた恩を忘れないヨ。」

「……………お前……………強い。」

「ン？」

出会うは三国最強の戦士

「あんた……………誰や？リンやあらへんな？」

「はっ、誰だいそりゃあ、俺の名は強欲だ。^{グリード}
武器構そんなもんえるのはやめな、俺は女を殺す趣味はねえ。」

内に秘めるは強欲なる最強の盾

「そんな！？呂布様の攻撃をまともに喰らって!？」

「何驚いてんだチビ、言っただろ『最強の盾』だって。その程度じゃあ傷一つ付けらんねえよ。」

「……………リンを……………帰せ！」

真・恋姫無双〜三国に舞い降りた強欲〜

始まりま……………せん！

恋姫は真の方はほとんど知らないんですよ。(オイ

いっそのことアニメを見てそこにオリキャラでも突っ込もうかなあ

……………でも今はアニメを見る暇も無いしなあ……………それ言ったらこんなポツネタを考える暇も無駄ですが(思考時間約一時間)

そろそろポツネタコーナーもキツくなって来ましたね。

何がキツいかって、本編よりもネタに行き詰まるからですよ!!!(自分から初めて何言ってるんだか

正直ポツネタコーナーに関する感想がまったく無かったので辞めちゃおうかな?とも思ったんですが。

そう思った矢先一人ですがに最近ポツネタも楽しみにしていると
言う感想が。

……………頑張ります！

竜神の依頼（中）（前書き）

申し訳ありません。

リアルの方が色々と忙しく、しばらく放置していました。

これからも安定しない更新になりますが、どうか見捨てないでください（泣）

竜神の依頼（中）

「 やっと・・・着いた・・・」 周りの視線に耐えきり、ようやく美神令子の事務所まで到着した。

この時点で我^{オレ}の精神的疲労は既にピークに達しているのだが大丈夫なのだろうか？

「 そうだアーク、お前は一足先に天竜童子を探しに行ってくれ。」

「 えっ！？どうしてですか!？」

「 忘れたのか？お前は一応妖怪だぞ・・・しかも黒の猫又、こつちの業界じゃあ捕獲すればかなり値打ちがある存在だからな。」

なんせ犬猫狐狸は代表的な動物変化だからな、妖怪に詳しくない人間でも名前を知ってるぐらい有名だ。たとえ悪さをしなくても捕まえて売り物にしようとする奴もいるかも知れないのだ。

まあ、流石に現役プロのGSでそんなことをするやつは居ないと思うが、元々が妖怪とGSは敵同士なのだから無用なトラブルが起きないとも限らない・・・何てごちゃごちゃと言っているが要するに

「ぶつちやけお前が今一緒に来ても邪魔なだけだからさっさと探してこい。」

「酷いつ!?!」

じゃあ何で此処まで連れて来たか?

そりゃ当然我が周りの視線に晒されるのに、コイツが呑気に家でくつろぐのはなんかムカつくからだ。

理不尽? 聞こえんなあ?

「じゃあ行きましょうか小竜姫様。」

「えっと・・・良いんですか? あの子ちょっと泣いてましたけど?」

「お気になさらず」

「いえ・・・でも・・・お気になさらず」「・・・はい・・・」

そんな軽いやり取りをしてから我達は建物に入って行った。

side 小竜姫

な、何なのでしょう、この空気は・・・

「へえ アンタがあの人GSねえ・・・」最近、家の客を持って行ってるルーキーは(副音声)「」

「ああ、この度は貴女のようなベテランのGSに会えたことは光栄に

思う。「さて、何の事かな? (副音声)」「

「あらそう?それはありがとう。」

「アンタの噂も最近良く聞くわ。」「とぼけんじゃ無いわよ!ネタは上がってんのよ、安い料金で依頼を受けてる新人ってのはアンタでしょう!?(副音声)」「

「更に光栄だな、この世界でトップクラスの貴女に知ってもらえた」とわ。「家は真つ当な料金で仕事をしているだけだ。客足が減ったのならソレはこんな新人に客を盗られるアンタが力量不足なだけであるう(副音声)」「

「「 あはははハハハ」

何ででしょう、とても仲良く雑談している筈なのにとても空気が寒い。

こころ無しか幽霊のおキヌさんも脅えている様に見えます。

「でも心配だわ、GSは危険な仕事だから、帝督コンツェルトの御曹司にもしもの事があつたら会社も大変じゃない?」「GS業は遊びじゃ無いのよ道楽若社長! (副音声)」「

「いやなに、会社は優秀な弟と妹が継いでくれるからな、気にする必要はないさ。」「道楽の否定はしないが法外な金を要求するガメツイ女よりはましであるう。(副音声)」「

殿下の話をするまえに帰りたくなって来ました。

「（何でこんな事になったんだ？）」

ようやく小竜姫が説明をしている中、我は^{オレ}考えていた。

「（可笑しいな、本来はもっと友好的にするつもりだったのに。）」

そもそも、事の始まりは名前を言った時だった。

我の名前を聞いた途端、美神は突然喧嘩腰になり、その態度にムツと来てしまい・・・

「（予想をしてなかった訳じゃ無いが、此処まで嫌われていたか）」

自分の縄張りで突然出てきた新人^{ルキ}に客を盗られたんだからな・

うん　唐巢神父ならまだしも、この守銭奴が許すわけ無いな。

『オーナー、オーナー聞こえますか？』

そんな事を考えていると耳に着けていたイヤリングからアークの音が響いた

「・・・今の誰の声？」

「家の従業員だ　　どうした？
見付けたのか？」

『えつと・・・さつき見付けたんですけど、赤いバンダナを着けた男の人が童子様を抱えて走り去っちゃて・・・』

「　　見失ったと」

『うう　　疑問系じゃあ無くて確信なんですわ・・・確かにそうですけど！ちゃんと気配は覚えたから追跡も出来ますよ！』

「ならごちゃごちゃ言わずに追いかける、
お前の足は何の為に付いているんだ。
見付けたらまた連絡しろ。」

返事は待たずに連絡を切る
終わってから文句を言うならば高級猫缶でも買ってやれば機嫌は治るだろう

《喋る石なんて変わった石ですわね》

空気が弛緩したのを感じたのか今まで静か（空気）だった黒髪の袴を着た幽霊　　おキヌが話しかけて来た。

「いや・・・これは別に石が喋っているわけじゃあないんだが。」

「どういつ原理なのですか？」

続いて小竜姫が質問してきた

ちなみに美神令子は興味無さげに黙っていた

「この石は『通信石』と言って、特殊な波長の霊波を発信する鉱物なんだそうだ。

それを加工して二つの石の波長を合わせると今の様に電話をするみたいに石同士で話す事が出来るらしい。」

ちなみに制作者はドクターカオスだ

あの爺さん、資金と材料がちゃんとあれば色んな物を造るからな。

心の中でドラ もん呼ばわりしているのは我だけの内緒だ

「
って

それよりも早く行きましょう。

アークもあれでそれなりに優秀だから直ぐに見つけるだろうから、見付けた時に我達が遠くに居たんじゃ意味が無い。」

「あっ、そうですね。

急ぎましよう美神さん！」

「私はまだ了承した訳じゃないんだけどね・・・

まあ神様に恩を売れる機会なんて滅多に無いし。」

小竜姫に頼まれ渋々と言った具合に美神が立ち上がった

「（まあ、いくら我が気に食わなくても

プロとしては受けない訳にはいけないよなあ。」

原作よりも明らかにやる気のない彼女を見て琴紅はそう呟くのだった。

竜神の依頼（中）（後書き）

・・・短い

しかも中途半端すぎる。

今回出した通信石の様に琴紅はカオスに頼んで色んなアイテムを作
って貰っています。
理由の一つとしては、いざというときに宝具の存在をごまかす為で
もありません。

ボツネタ（もう普通にアイデアコーナーで良いかな？）コーナー
ワードンドンパフパフ

真剣に恋しなさいの世界に南斗六聖拳の五人（ユリアを除く）が転
生した様です。

・・・・・・駄目だ、マジ恋二次創作でしか知らないから口
調が全然分からないから書けない。

小雪の虐めを見てレイが

「テメエらの血は何色だあ！」って怒ったり

ユダが百代の戦う姿を見て

「うっ、美しい……ハッ!？」って言ったりしたら面白いのに。

そもそもマジ恋の世界で殺傷力抜群の南斗聖拳は無理があるかな？

誰か興味があつたら試しに書いてくれないかなあ？

一応、ボツネタコーナーのアイデアは基本的に自由に使って構わないです。

興味があつたら遠慮なく使ってください。（まあその時は一応教えてください）

竜神の依頼（後）（前書き）

リアルがなかなか落ち着かない（挨拶）

やっつけ気味に完成したけど

もっと文章量増やしたいなあと思う今日この頃
しかしながらも増えない日々泣きそうです。

竜神の依頼（後）

「どうだアーク、殿下を発見できたか？」

『 見付けました、どうやら百貨店の中に居るみたいです・
・場所は 』

美神令子の事務所を出た我は通信石でアークを連絡を取りつつ目的地へと先導している。

後ろでは美神令子に渡された（着せられた？）黒のスーツを身に纏いサングラスを付けた、明らかにソツチ系の職業の人と誤解されそうな格好の鬼門達と現代の服装を身に纏った小竜姫が街を物珍しそうに見回している。

「わっ！！わっ！！す、すごい！てれびじょんに色がついてるっ！！」

「小竜姫さま危険です！うかつに近づくと何が起こるか・・・」

「別にテレビに近づいても爆発なんかしないぞ」

爆発物に近づくかの様に警戒している鬼門に、つい呆れ気味になっ
てしまう。

「あつ “コンチパ”！？何ですここは！？お祭りの一種ですか！？」

「左から読むのよそれは・・・」

目を丸くさせっぱなしで次から次へと興味が移っていく小竜姫に美

神令子も呆れていた。

「（まあある意味では年中祭りのような物だが）」
生前、年齢を誤魔化して学生の内からやっていた我也当たれば祭りの様におお喜びしたものだ・・・

閑話休題

「あまりキヨロキヨロしないほうがいいですよ、この辺りは年中無休で人が溢れてますから
あまり離れると直ぐにはぐれてしまいます」

「うっ
すみせん帝督さん・・・どうにも初めて見るものが
多いもので」

「まあ人間200年も経てば随分発展しますからね」

《私も死んで結構経ちますけど文化の発展って本当に凄いですよね
！》

「とにかく、殿下の場所は私の部下が把握出来てますから
余計な寄り道をする必要も無いのですから急ぎましょう」

「そ、そうでしたね！！一刻も早く殿下を見付けないと！！殿下は
まだ小さいので私も心配で心配で・・・」

《あれ？》

何気ない雑談を三人（と言っても二人は幽霊と竜神だが）でしていると、おキヌが何かに築いたような声を出した

「どつした？」
「どつしました？」

我と小竜姫が同時に聞くと

《美神さん達はどこへ？》

原作通りと言えばそうなるのだが此方側になるとは

……
とりあえず一言……

「いきなりはくれた……」

Sideアーク

マスター
ご主人様に言われて一度は見失ったけど何とか天竜童子様を発見し
ご主人様に不思議な石で連絡した後、僕は監視を続けていた。
童子様はなにやら人間の子を見ながら悲しそうな目をしている。

「……人間の子と言うのはいいのう、余は生まれてから700年・
・父上はいつも忙しくて、遊んでもらったことなどほとんどない
……」

それは……とても悲しいことだな……

僕も前のご主人が死んでからはあの森をずっと守っていたけど……
一人は、とても淋しくて……とても辛い物だった……

人も、妖怪も、竜神も、皆やつぱり孤独は辛い筈だから・・・

《お　ク！　アー　とうろ　ク》

そんな風に感傷に浸っていると、ポケットに入れておいた石から声が聞こえてきた

《おいアーク！！応答しろ！！》

「　あつ！！？はい雇い主^{オーナー}なんでひょうか！！？」

突然だった為につい噛んでしまいながらも不思議な石を取り出す

《　少しトラブルが発生した・・・ハッキリ言うと美神令子と鬼門達とはぐれた、本来なら直ぐに合流したいのだが生憎我はこの辺りの土地勘が無い》

「・・・（・・・ああ、マスターのいつもの癖か）

「　きつとこの辺りの地図を忘れてたりして、うっかりしちゃったんだろ
うなあ　　言ったら怒られるから口には出さないけど・・・」

《　　なんだかその沈黙がいやに気になるが・・・とにかく、
今すぐには此方は合流できないからお前は先に着く鬼門達と合流し
て殿下を捕まえる・・・》

正直、何か嫌な予感がする　　なるべく注意しろ》

「　　！！？・・・分かりました」

マスターの予感をよく当たる・・・つい最近あったばかりの僕にさえ分かるほど当たるのだ。

きっと何かが起こる・・・人知れず僕はそう予想した。

そしてその予想は見事に当たったのだった・・・

建物を破壊する程の大爆発に巻き込まれると言った結果によつて。

竜神の依頼（後）（後書き）

短い！しかも超端折ってる！？

まあ良いか（開き直った）

元々ギル様無双が見たくて作った小説だし
遅筆なんだし展開は速いほうが良いだろう

と言うことで恒例の最近コツチを考えるほうが楽しくなってきたボ
ツネタコーナー（ドンドンパフパフ）

もしも禁書目録の世界にイスカリオテ機関があったら

「アイクビショップ
最大主教！！」

「ひゃああ！？ステイル！！？突然なに？！ことになりけるのよ！？」

「暢気に風呂なんかに入ってるんでこれを見てください！！！」

「いったいなんだと言うけるのよ　　チヨ！？」

「ローマ正教がついにヴァチカン法王庁特務局第13課を学園都市
に送り込もうとしているのですよ！？」

「お、おおおおおちつきしけるのよステイル！？13課と言えども
ピンからキリまでありにしけるのよ、そ、それで誰が学園都市の上
条当麻を狙ってられるのかしら」

「落ち着いていられません！13課からの戦力は一人・・・アレキサンドル・アンデルセンです！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あんでるせん？」

「ええ、アンデルセンです」

「・・・・・・・・・・。」「パラティン 聖堂騎士」「バイコネット 銃剣」「エンジェルダスト 天使の塵」とかの？」

「「殺し屋」「首切り判事」「リジエネレーター」とも呼ばれているあのアンデルセンです」

「ど、どどどどつすねべきにありけしなのかしら！！」
「？」

「ええい！パニくるな！！とにかく！今動かせる戦力を学園都市に向かわせるんだ！！あんな狂信者があの街に入ったらインデックスが危険じゃないか！！」

「だ、だれだ・・・あなた・・・・・・・・」

「上条・・・当麻・・・だな」

シャキン

「は、刃物おおお！！？いきなり何をつてギヤアアア！！」

「かわしたか・・・だが逃がさん・・・我らは神の代理人、神罰の地上代行者

我らが指名は、我が神に逆らう愚者をその肉の最後の一片までも絶滅すること・・・AMENエイイイイイメン」

「（ローマ正教か！？やばい！！とにかくやばい！？早く逃げないと）」

「結界は貴様の右手には意味を成さないか・・・まあ良い、直接その首を切ってくびり殺してやる」

カミジヨーさんオワタ¥（^o^）ノ

そういえば明日、て言うか今日劇場版FATEのDVD発売か、近所の映画館じゃあ上映してなくて見れなかったんだよな・・・wktkが止まらない。

戦闘直前(前書き)

指が進んだのと前回があまりにも短すぎたために何と連続更新！

近くのT TAYAに劇場版FA TEがまだ来てなかった(泣)チキシヨーと言う気持ちで作ったためテンションが変になっているかも知れない。

・・・ヤレヤレだぜ。

戦闘直前

美神令子除霊事務所が大爆発を起こし大破した。

そのニュースと共に現場を映している電化製品屋のテレビを小竜姫とおキ又ちゃんが呆然と眺めていた

「アーク！！アーク！！・・・駄目かここまで繋がらないとなると、通信石を落としたか、壊したか、それとも 何者かに殺られたか・・・」

《そつ！そんなこと無いですよ！？ほらっ！この作品でそんな簡単に人が死ぬわけ無いじゃないですか！！？》

「そ、そうですよっ！きつと皆生きていますよ！！」

「・・・アークは人間じゃなくて妖怪なんだが・・・あとおキ又ちゃん、メタな発言は不味いよ」

そりゃ、実際は生きているだろうけどさ・・・

問題はどうかやって探すかなんだよな・・・原作通りならたぶん東京湾かどこかに居れば合流できるだろうけど・・・

「仕方ないな」
そう呟いて我は【オレ王の財宝ゲイトオブパピロン】を開き、蔵の中から“ある物”を取り出した。

その“ある物”とは・・・

「特定妖怪発見器」（某未来型猫狸ロボの裏声で）」

自分でやっといてなんだが、すげえ似合わない・・・英雄王の体と声で何やってんだ我は。

「何ですか？それは？」

ネタを知ってか知らずか

まあ知らないのだろうけど

完全にスルーしつつ小竜姫は問いかけてくる

《腕時計・・・ですか？》

そう我が取り出したのは一見普通のデジタル時計だが・・・

「そう見えるが違う・・・これは、事前に登録してある妖怪や霊等の霊波の波長を発見し、追跡することが出来る優れものだ！さらに防水・防熱・衝撃にも強く、例え一万m上空から海や火口に投げ捨てても壊れない優れものなのだ！！」

ちなみに当然カオスの作品である。

「わあ！凄いですね！」

・・・あれ？じゃあどうしてはくれた時に使わなかったのですか？」

「・・・・・・・・・・れてた（ボソ）」

「はい？」

「・・・・・・・・・・忘れてた」

気まずい沈黙が三人の中に流れる。

《 だ、大丈夫ですよ誰にでも“うっかり”失敗してしま

「うごともありますよ！！」

「グツ！？」

グサリと来た

「そ、そうですね！“うっかり”忘れてた事なんて誰にでもありませんよ！」

「グハツ！！」

止めが刺された、我は倒れた、スイーツ（笑）

って違う違う、倒れてどうする倒れて!?

しかしこう“うっかり”“うっかり”と連呼されると途轍もなく心に刺さる。

自覚しているだけあってだが・・・

「と、ともかく使っぞ！アークの霊波は登録してあるから、アイツが無事で美神達と一緒に居るならこれで発見が出来るはずだ」

言うが早いが早速ボタンを押した

すると「探索中・しばらく・お待ち・ください」と機械的な女性の声の流れ　　まあ、ぶっちゃけマリアの声だが

テレーッテレーッレレレレレレレレレレレレテレーッテレーッレレレレレレレレレレレ

「なんで“愛を　りもどせ”なんだよ！！？」

探索機から突然流れだしたBGMに突っ込みを入れてしまった我に罪は無い筈だ

っ！かあのジーさん最近アニメを見出したのか？その影響か！？発

明品に変なネタを取り込んでんじゃねえよ!!!?

「発見・いたし・ました」

その声と同時に、ピコーンピコーンと言う電子音と共に腕時計の画面に大まかな地図が映されその中に一箇所が点滅している。

「海の方だな・・・どうやら下水道を通過して移動しているようだ
!!!?これは!?!」

「っ!?!?急ぎましょう!!強い力を持つ何者かが現れました
!!!」

クソツもう来たのか!?!?

「アーク・・・我達が行くまで持たせろよ!!」
伝わるわけが無い通信石に我はそう呟いた。

夜の海を一般のモーターボートが本来ならばありえない速度で移動していた。

乗組員は人間、美神・横島

竜神、天竜童子

竜族イーム・ヤーム

そして妖怪、アークであった。

何故彼等がこんな事になっているのか、
その理由は半日前に遡る。

アークは琴紅からの連絡の後、鬼門達の気配を頼りに合流し

その際、妖怪であるアークを見た美神と一悶着あったのだが

天竜童子（何故か一緒にいる横島も）を発見したのだが、

元々人間界の遊園地に行くのが目的だった天竜童子は捕まるわけにはいかないために逃げ出してしまふ。

そこまでならば、想定範囲内であつたのだが問題が発生してしまふ。

人間界に墮とされた竜族、イームとヤームが天竜童子の身柄を連れ去ろうとしたのだ。

その場は咄嗟の判断で鬼門達（ついでに横島も）が足止めをすることで美神とアークは天竜童子を事務所まで連れて行く事が出来たのだが……そこには既に（横島を脅して場所を聞き出した）イームとヤームが待ち伏せていたのだ。

そして一旦、天竜童子が捕まえられたのだが、その場に何者かが現れた事により、状況が一変した。

そいつは美神達 協力者であるはずのイームとヤームをも巻き込んで “火角結界” と言う中にいるものを吹き飛ばす強力な結界に閉じ込めたのだ。

爆発する寸前、絶体絶命かに思われた一同だが、その場にいる者

正確には美神令子と天竜童子の二人だが　　の咄嗟の判断により辛くも結界から抜け出し、緊急脱出用の秘密通路からなんとか爆発の前に逃げ出すことに成功したのだが……

《ええい！クソツ！切りがねえぜ！？》

二本の短い角を生やした小柄な竜族ヤームは自分の角から強力な靈波を出し、襲いかかる“追跡者”を吹き飛ばしながら叫んだ。

「グダグダ言ってる暇があるなら一匹でも多く倒しなさいよ！？」
靈力を込め光輝く神通棍を振るい、“追跡者”を滅しながら美神も叫び返す

「わあー　　！？美神さんツ！前っ！前から来てますっ！！」
ボートのハンドルを握りながら横島は恐怖によって滝のように涙を流しながら叫ぶ。

そして横島の言う通り前方から“追跡者”が巨大な口を開き襲い掛かって来た。

「こん　　のお！　　ハア！！」
その“追跡者”を妖力を込め、30cm程に伸びた爪でアークが切

り裂いた。

「よ、余はこ、怖くなんかないぞ！く、来るなら来るがいい！」

《で、殿下、あ、危ないから、さ、下がってるんだな！》

後頭部に二本の角を生やし恐竜の様な顔をした背の高い竜族イームは天竜童子を守りつつ、周りを警戒していた。

美神令子・イーム・アークを主力として、幾つもの眼を持つ巨大な蛇の“追跡者” ビッググイーターを蹴散らす一同だが、生憎狭い船の上と言う条件故に苦戦を強いられていた。

この追跡者達は脱出後、下水道を通って海に出ようとしていた一同の前に突然現れ、襲いかかって来たのだ。

どれだけ倒しても次から次へと現れるビックグイーターに下水道の様な狭い場所ではいずれ物量に押し潰されると判断した一同はなんとか広い海まで逃げる事が出来たのだが……どの道、何時までも沸き続けるビックグイーターに次第に追い詰められていく。

「あゝもう！一体何匹いるのよ!？」

だが美神達はそんな自分たちを見下ろすビックグイーターを使役する存在に気付いていなかった。

「おろか者め……人間風情が何をしようと、逃げられると思うか

「！」

空に浮かび美神達を見下ろすフードの魔物（？）が掌に靈波を籠め、美神達に向かつて強力な靈波を放出した。

その時ようやく上空の存在に気付いた美神達には回避も防御も不可能だった……

美神達には、だが。

「うわっ！！？」

ドン！とボートの直ぐ近くで靈気の爆発が起こった。

だが、ボートに乗る者は皆無傷だった。

「！！？」

爆風の中から現れたのは。

「仏道を乱し、殿下に仇なす者はこの小竜姫が許しません！！

私が出来た以上、もはや往くことも引くこともかなわぬと心得よ！！」

「小竜姫！！」

ギリギリのタイミングで助けに来た小竜姫に皆が歡喜の表情を浮かべる。

「嘗めるな！」

だがフードの者は再び靈力を籠めた右腕を振り上げた。

その時。

「お前もだ」

ダァン！と言う音と同時に飛来して来たナニかによって振り上げた腕が強く弾かれた。

「　　っ！？何者だ！？」
呆然と弾き飛ばされた腕を見た後に、フードの者は音源の方へ視線を向ける。

「　　！マスター！？」
優れた感覚器を持つアークが真つ先に気付いた先には……
近未来的な形をした巨大なライフルを構えた琴紅の姿があった。

「　　反動は極小、照準に狂い無し、威力も上々……精霊石銃【ホーリー】完璧だパーフェクトドクターカオス！」

舞台は整った。

これより夜の死闘が始まるのだった。

戦闘直前（後書き）

それなりに良い“引き”が演出できたかな？

やっぱり既存の原作にキャラクターを追加させるのは難しいなあ．．

・
ノリが続く限りは早めに更新します。

しかし長い時間を使って長い文章を作るべきのと、早い時間で短い文章を作るのではどっちの方がいいのかなあ．．．

まあ長いと言っても自分には10000文字も詰め込めるだけの文章力はないんですけどね！

それはそうと、今回はポツネタコーナーはお休みしてちょっとしたアンケートを取ってみたいと思います。

まだ少し先になると思いますが、琴紅の従業員にもう一人オリキャラを追加したいと思っていますのですがこの中でどれがいいですかね？

1、テレサの話の後に暫らくしてカオスが失敗を糧に作り上げたアンドロイド（ただしド天然）

2、巨大な十字架を武器にして戦う美人シスター（ただしDS）

3、霊能力者じゃないのに異様なほどに身体能力が高い二十歳の男（ただし超ビビリ）

4、何らかの妖怪（例・座敷わらし・雨女）

5、あえての原作キャラ

以上5つです。

一応3以外は皆女性キャラにするつもりです。

アンケートをする時に「このキャラを出すんならこいつしたら面白くないか？」などの意見がありましたら一緒に答えください。

よろしくお願いします。

海上の戦い（前書き）

いつもよりはちょっとは多めに出来たかな？
何とか連続で更新出来てます。

これが何時まで続くのやら・・・

アンケート現在の途中経過（投稿時）

1・2票

2・4票

3・0票（笑）

4と5・1票

どSシスター（仮）強いなオイ

前回伝え忘れましたが締め切りは10月3日までといたしますので
それ以降の投票は向こうとさせていただきます。

海上の戦い

精霊石銃【ホーリー】

言うまでもないがこれもカオスの爺さんの作品であり先日受け取ったばかりの物だ。

その名の通り、特殊加工を施した精霊石のエネルギーを弾丸へと変化させて打ち抜くことが出来るオカルト兵器である。

ちなみに一つの精霊石で2〜3発程度しか打てないため、普通に使っていれば精霊石が幾ら合っても足りない馬鹿げた代物なのだが・・・我は^{オレ}精霊石を大量に所持しているため、その問題は無いのだ。

それは何故か？

答えは【^{ゲートオブパピロン}王の財宝】だ。

世界中のあらゆる財を納めたこの宝具には何と精霊石すら大量に貯蔵されていたのだ。

おそらくは向こうの世界でも精霊石が存在していたのだと思われるが・・・まあ、その辺の細かいことは気にしないことにしている。

「　　つと！」

そんな事を考えていたら数匹のビッグギターが此方に向かって来た。

それを見た我は直ぐに弾の種類を狙撃型から散弾型へと切り替える。

「　　まだまだ・・・もっと引き付けて・・・撃つツ！」

十分にビッグギター達を引き付けきつてから我は引き金を引い

た。

ダダダアン！と先程とは違い同時に複数の銃声を鳴らしながら銃口から幾重もの光線が吐き出され、向かって来たビッグイーターを残らず殲滅した。その直ぐ後に銃から碎けた精霊石が吐き出された。

「もうリロードか・・・やっぱり燃費の悪さは多少問題あるか」

そう呟きつつ新たな精霊石を【ホーリー】に詰め込んだ。

「まあ、本来なら一回使い捨ての精霊石を複数回使えるのだと思えば充分か」

それに、腐っても我は弓兵^{アーチャー}だ遠距離攻撃はお手の物さ・・・
・・・たぶん。

そうぼやきながら、我は照準を船に纏わり付いているビッグイーターに合わせるのだった。

場面は変わって空中へ

「チツ・・・何者だあの金髪小僧・・・まあいい、それよりも」

そう言いながら自分の姿を隠すマントに手を掛ける。

「音にきこえた神剣の使い手小竜姫か・・・お前と戦えるのはうれしいぞ！...」

「私を知っているところを見ると、お前も竜族かつ!?
何者です!? 名乗りなさい!？」

そう小竜姫が問いかけると共に相手は身に纏っていたマントを小
竜姫へ投げつけた。

それを咄嗟に剣で切り払った小竜姫はそのマントの影から突き出
された刺又槍をいなした。

「やるね、エリートさん!! だがそんなお上品な剣じゃあたしは倒
せないよっ!!」

全身を隠すマントから姿を現したのは長い髪に蛇のような目付き
のをした“女”だった。

「女!？」

その意外な事実一同が驚く。

「しかもえちちしとるやないかつ!! 意外だった!!」

一部は論点がずれていたが

「お前は! 竜族危険人物黒便覧丸はの5番!! 全国指名手配中、
“メドーサ”!!」

現れた人物を知っていた小竜姫の驚きは他の者の比ではなかった。

「ほう、あたしを知っておいでかい!!」

そう言つと同時にメドーサは髪から自らの眷属のビッグイーター
を吐き出す。

「美神さん! 殿下を連れて早く帝督さんのところへ! こいつは邪悪
な竜族の中でも最悪の魔物です!!」

「わかったわ! その“おばはん”はまかせるわよっ!」

美神のその余計な一言がメドーサの逆鱗に触れた。

「お・・・おばはん!?!」

見る間にメドーサの顔色が怒りに染まっていく。

「誰がおばはんだ　　ッ!?!」

怒りの声と共に無数のビッグイーターが美神達の乗るボートに襲い掛かる。

「美神さん、余計なこと言わんでくださいよっ!?!」

「あいつのせいで私は散在してんのよっ!?!あんなのまだ足りないわっ!もう一言一言言っつてやりたいっ!?!」

何よりも金が大切な美神は事務所が破壊されたことによる浪費が許せなかったためであるが、この二人は案外まだ余裕がありそうだった。

「お前の相手は私です!それ以上はさせません!?!」

そのまま自分自身も美神達に襲い掛かろうとしていたメドーサだったが小竜姫の剣戟によってそれは阻止された。

「ヒス持ちヘビ女ーっ!?!バストがタレて戦いのジャマなんじゃないのっ!」

「そんなこと言いに戻ってこないでくださいよっ!?!」

「こ・・・殺す!?!」

わざわざ身の危険を冒してまで挑発を行う美神は流石と言つべきなのか、無謀と言つべきなのか・・・

「ガッ!?!?」

だがそんな美神達に気を取られていたメドーサのコメカミに再び衝撃が訪れ一瞬怯んでしまう。

「油断大敵だな・・・狙撃する側からすれば良いのだ」
琴紅による援護射撃だ。

皆が他の事に気を取られている間に琴紅は美神達を追っていたビッグイーターを素早く片付けていたのだった。

美神がわざわざ挑発に戻ったのも追って来たビッグイーターが居なくなつた事で余裕が出来たからでもあつた。

「こん・・・の!クズの分際で!!」

馬鹿にされた怒りと痛みによつて狙いを琴紅に変えようとしたメドーサだが、その前に小竜姫が立ち塞がりやむ終えなく小竜姫と剣戟を交わした。

「・・・やっぱり、これじゃあ少しばかり威力が足りないか?」

人知を超えた戦いを繰り広げる二人をスコープ越しに眺めながら琴紅は呟いた。

幾らエネルギーを凝集しようと、元は所詮一つの精霊石だ。

メドーサクラスの魔物では一瞬怯ませる程度で精一杯だ。

「まあ、一瞬怯ませるだけでも大分違うがな・・・」

現にメドーサは小竜姫と戦いながらも此方から注意を逸らさない。小竜姫ほどの相手と戦うのに一瞬でも動きが止まるのは敗北を意味するからだ。

「(原作では、仲間を庇つて傷を負つた小竜姫だが・・・幸い向こ

うにはアークがいるし、あいつ等がやられる事もないだろう・・・
なんなら、この場でアイツを倒しても
（
だがメドーサは小竜姫と互角かそれ以上に戦えるほどの魔族だ・
・高望みしては逆に此方がやられる。

「とにかく今は、あいつ等がゴツチに来れるまで援護に徹するしかないなッ！」

言い終わると同時にメドーサが新たに生み出したビッグイーターを打ち落とす。

美神達の方以外にも我を鬱陶しく思っている為か何匹かは此方に向かつてくるからな・・・この場のメンツにはなるべく宝具の存在を隠しておきたいし、接近させないことは中々重要だからな。

「（チィ！うざったい奴だな！！）」

正面から逆袈裟に切り込んで来る小竜姫の剣を捌きながらメドーサは思った。

二人の戦いは今、熾烈を極めていた。お互い、竜族の中でも高位の存在であり、実力も拮抗している。小竜姫が切りかかれればメドーサは直ぐ様、捌くか回避をした直後に刺又槍を突き出すが、攻撃直後の硬着もなく身を引いた小竜姫には届かない。

正に一進一退、お互い決定打に欠けてはいるが、一瞬の隙で勝敗が決しても可笑しくはない。

「ッ！！」

一旦、距離を取ったメドーサが直感に身を任せて首をのけぞらせた瞬間、蒼く輝く光線が目の前を通過した。

琴紅の射撃である。

両者に決定的な違いがあるとすれば、それは小竜姫と違ってメドーサは常に琴紅の方にも意識を向けなければならぬ状況にあった。本来、メドーサレベルの霊格ならば、琴紅の精霊石銃【ホーリー】程度の威力なら多少の痛みを感じ、一瞬怯むだけの攻撃など恐ろしくもないのだが・・・今戦っているのは竜神界に名を轟かせる小竜姫だ。

自分が劣っているとは思ってはいないが、圧倒するほどに自分が優っているとも思っていないのだ。

そんな相手に一瞬でも隙を作る訳にはいかない為に、メドーサは琴紅から意識を外せず、結果的に互角ながらも苦戦を強いられていた。

「(クズの分際でツ!!)」

だがプライドの高いメドーサは自らが見下している人間相手に嘗められている今の状況に憤怒の表情を浮かべていた。

小竜姫の意識が一瞬でも自分から外れれば、即座に琴紅に襲いかからんばかりに、怒りが頭の中を埋め尽くしている。

「() 落ち着け・・・激昂すれば奴等の思う壺だ 　　そ

うだ、元々あたしの目的は小竜姫の奴を片付ける事じゃない
ポートの奴等がああ金髪小僧と合流した瞬間、竜神王の息子共々纏めて片付けてやる!!)」

一度頭を冷やしたメドーサは防御に回りつつも機を待っていた。

そして嵐のような小竜姫の剣戟と琴紅の銃撃を耐え忍んでいたメドーサにその時が訪れた。

「（　　）今ッ！！ハア　　ッ！！」

一瞬の溜めもなく霊波を放ったメドーサ。
当然そんな苦し紛れの攻撃にダメージを受ける小竜姫ではなかったが、切り掛かった直後だったため反応が遅れ、やむ終えなく受け止めたのだが・・・

「こんなものっ！！　　ッ！？いない！？」

霊波の煙幕で小竜姫の視界が一瞬遮られた瞬間、メドーサはボートから港へ移ろうとしていた美神達に狙いを定め、流星の様な速度で飛んでいった。

「　　しまった！！殿下を狙って！！？」

瞬時にそれに気付いた小竜姫は急いでメドーサを追いかけていった。

「　　ッ！！マズイ！天竜童子を連れて早く逃げる美神令子っ！自分たちの方へと向かってくるメドーサにいち早く気付いた琴紅が美神達に警告をするが、メドーサの最初の狙いは・・・」

「　　先ずはお前からだっ！小僧！！」

琴紅だった。

メドーサにとって散々戦いの邪魔をしていた琴紅が真っ先に襲う対象だったのだ。

「　　グッ！この！！」

向かって来るメドーサに銃口を向ける琴紅だが、メドーサ相手には遅すぎた。

「詰めが甘いんだよっクソガキ!!」

メドーサが即座に琴紅の持つ銃に向かって自分の得物を下からブチ当てた。

ガギーン!と言う甲高い金属音とともに琴紅は銃ごと両腕を上弾き飛ばされ、万歳をする形で隙だらけになってしまふ。

その瞬間、すぐさま刺又槍を引き戻したメドーサが琴紅にその先端を向け、突き刺す体制をとる。

その顔は既に勝利を確信した凍り付く様な残酷な笑みが浮かんでいた。

「(死　ぬっ!!!?)」

その瞬間、琴紅は死を確信した。

だが………

「マスターッ!!」

横から勢いを付けてぶつかってきたアークによって跳ね飛ばされ、ギリギリでさける事に成功した。

「あぐ　ッ!?!」

だがその代償に琴紅を庇ったアークが左肩を貫かれてしまふ。

「　ッ!!?!?アーク!!」

弾き飛ばされた痛みも死の恐怖も忘れ琴紅は叫んだ。

「チッ!邪魔しやがってこの下等妖怪がつ!!」

苛立ちの叫びと共にメドーサはアークの右頭部を蹴り飛ばし、その勢いで肩に深く刺さった刺又を抜いた。

「うああああ　　っ!!!!」

蹴り飛ばされた痛みと強引に刺又引き抜かれ、ただでさえ深い傷

が挟れ、アークはたまらず苦痛の叫びを上げた。

「 ツ！？ 貴様アアアア！！！」

「貧弱小僧が吠えるんじゃないよっ！！！」

怒りの声を上げる琴紅を見向きもせず、メドーサは次に天竜童子を狙って未だに美神とアーク以外に状況が把握しきれていないボート組の一同の間を抜け、すぐさま天竜童子の目前へと迫り、刺又槍を振り上げた。

「 死ねえ！！！」

「 させるかぁ！！！」

メドーサが刺又槍を振り下ろそうとする刹那。

琴紅は虚空から鎖を引き抜き、メドーサに向かって投げ付けた。

「天の鎖エルキドゥよッ！！！」

真名を開放された神をも縛る鎖は天竜童子に当たる直前の槍を蛇のように絡め取る。

「 な にい！？ ！」

突然現われた鎖に一瞬思考が停止するメドーサだが、本来の“敵”は既に自らの背後まで迫っていた。

「 メドーサっ！覚悟っ！！！」

「 ツ！！しまっ グアッ！！！」

追いついた小竜姫の神剣によってメドーサは右肩から腰に掛けて切り裂かれた。

「終わりですっ!!」

止めを刺そうと切りつける小竜姫だが、一瞬速くメドーサは空中へと逃げた。

「クソッ今日の所は引き上げる・・・次に合った時は覚悟しておけっ!!」

そう言ったメドーサは自らの最大速度で撤退していった。

「アーク!大丈夫かアーク!!」

メドーサが完全に逃げて行った事を確認した琴紅は直ぐにアークの傷を止血し、何度も呼びかけていた。

「だ・・・大丈夫・・・ですよ・・・マスター・・・妖怪は・・・結構丈夫なんですから・・・」

痛みと出血で途切れ途切れながらも返事をするアークに様子を見ていた一同も安堵の息を吐いた。

「・・・そうか・・・だが、暫らくはGS業は休業だな・・・今は傷を速く治すことに専念しろ」

「わかり・・・ました・・・すみません・・・迷惑を掛けて・・・」

「気にするな、我^{オレ}を助けて傷を負ったんだ・・・我の方こそ迷惑を掛けたな」

「ハハハ・・・どういたしまして・・・すみません・・・少

海上の戦い（後書き）

強引だったけど、なんとか対メドーサ戦終了いたしました。

ピローン アークへの好感度が上がりました。

そしてメドーサへの因縁も発生しました。

次回の強制イベントは【GS試験編】です！お楽しみに
・・・はい、冗談です。

GS試験編は実際やるつもりですがどうするかはまだ漠然としか決まっていません。

次回からは繋ぎに少しオリジナル話が入ってから原作話となる予定です。

前回休みだったボツネタコーナー

銀八先生が生徒会役員共の学校の教師をするようです。

「よお〜生徒会長、そんなところ（鉄棒）にまたがって何してんだ？小学校時代を思い出してんのか？」

「おお銀八先生こんな所で合うのとは珍しいですね、先生の方こそこんな人気のない公園でどうしたのですか？ まさかっ！この公園のトイレの中で自家発電を！？」

「する訳ねえーだろうが、おまえ頭はいいけどやっぱり馬鹿だろ、大体こんな所で自家発電するくらいなら俺はソープにでも行って解消するわ・・・やべえ、こんなこと行ってたら本当にムラムラして

来た・・・チヨットおまえどっか行け！俺トイレ行ってくるから。」

「おお金持ち嬢ちゃん、奇遇だな」

「あらあ、銀八先生こんにちは」

「はいコンニチハ・・・相変わらずポワポワしてるなあんだ」

「えええゝそんなこと無いですよゝ朝もしつかり　して来たから目もしつかり冴えてるんですよゝ」

「はいアウトーツ！！？朝っぱらから重い下ネタかますんじゃねーよ！アニメでも規制音だらけでギリギリだったんだぞ！！」

「よつチビ村今日も元気そうだな」

「（ビキッ）萩村ですッ！」

「おおー悪い悪いミニ村」

「わざとかッ！？わざとやってんだなこのクソ教師！！」

「よつジミー今日も突っ込み頑張ってるか？」

「えっ・・・ジミーって俺の事ですか？」

「おまえ以外に誰がいんだよ・・・主人公の癖にマガンの横の柱の紹介文の所でいつも生徒会長の後ろで紹介されてるおまえ以外によお」

「人が気にしてることお!!」

・・・うん、これ小説にするの無理

アークの休日と琴紅の友人（前書き）

繋ぎです。

ええ原作には一切関係ない完璧な繋ぎですとも。

そろそろペースが落ちるかな？

と思いつつも気が続く限りかき続けるぜ！！

アークの休日と琴紅の友人

前回の出来事から2週間たった。

妖怪としての生命力と回復力でアークは完全に回復したが、一応大事を取って今日一日はアークに完全休業日を命じた。

我^{オレ}としても、この2週間一人で働き詰めだったために疲れていたことも理由の一つだが……

いや本当にきつかった。

実は前回の事件で美神令子の事務所が倒壊してしまった為、向こうに行っていた依頼の半分以上が私の元に戻って来たのだ。

高校を疎かにするわけにもいかなかった私は、学校が終われば直ぐに依頼を片付けるハードスケジュールを14日もの間しいらされたのだ。

そう言う訳で、この回復し終わったアークへの休暇は、ようやく落ち着いた我自身の休みでもあった。

「……しかしアイツ……何処に行っただろう？」

我がその旨を伝えた後アークは幾らかの現金を持ってどこかへ出かけたので、今は事務所には居なかった。

まあ我も休暇中のプライベートな事を言及するつもりもないから、疑問はそれきりにして久しぶりに実家に顔を見せるために準備をするのであった。

「 えーっと・・・ 駅、 駅は・・・ 」

琴紅がアークの動向を気にしていた時、その本人は地図を片手に駅内を見回しながら彷徨っていた。

膝辺りまでのグレーのハーフパンツと赤い生地で胸元には小さな黒猫がプリントされているTシャツを着用し、頭の耳を隠すための白い帽子を被り、背中には大きなリュックを背負っている格好のアークは不慣れな電車を使って、事務所から4県ほど離れた田舎まで移動していた。

その背負ったリュックの中には、途中で買った和菓子や花などが入れられていた。

「 ああ、ここだここだ・・・懐かしいなあ、ほとんど変わってないや 」

その後も十分ほど電車に揺られ、ようやく電車から降りたでアークは眼前の田舎の村をみてそう言った。

「あの森もなんだが懐かしいなあ・・・小妖怪の皆は今も元気かなあ？」

そう、ここはアークが琴紅と初めて出会った森の直ぐ近くにある村だった。

「 っと、それはまた後で、先ずは真耶お婆ちゃんのお墓に行かないと 」

そう言ってアークは住み慣れた場所の様な自然な足取りで、村へと入っていった。

この村は、アークがまだ普通の猫だった時代に、当時の飼い

主だった女性と暮らしていた村であった。

村の人々が畑仕事などに性を出しながら見慣れないアークの姿を見て首を傾げているのも気にせず、アークは村の中にある唯一の墓場へと到着した。

「あーあ・・・こんなに汚れて散らかっちゃってる・・・」

目的の人物の墓石の前に立ったアークはその墓の周りに生えている雑草を引き抜きながらそう呟いた。

アークの言う通り、その墓石の周りは手入れが全くされてなく、墓石は蔓が巻き付き汚れ切っており、周りの土も酷く荒れ果てていた。

それを見れば、この墓の主には参りにくる者は皆無だと理解できる。

「まあ仕方ないよね・・・もう200年も経っちゃったんだし・・・」

懐かしむように　　されど、悲しむような顔と声をアークはしている。

「　　もうお婆ちゃんは成仏して、こんな墓には誰も居ないのに・・・人間って、どうしてこんな風にお墓なんか作るのかな？」

そう言いながらもアークは墓石に巻き付いた蔓を引き千切り、持参していた手拭いをバケツに入れた水で絞り、墓石を丹念に磨き始めた。

「　　真耶お婆ちゃん・・・僕ね、今GSの助手をやってるんだよ！そりゃあ、危ない事も沢山あるけど毎日が充実してるんだっ！その社長の琴紅って人がお婆ちゃんが好きだった森を荒らしていた

赤帽子達も皆やつつけてくれたんだよっ！

お婆ちゃんが居なくなつて・・・ずっと寂しかったけど・・・今は取つても幸せなんだ！」

先程、自分で意味など無いとぼやいていた墓だが、大切な人の遺骨が埋まっていると思えば、その人がそこに居ると思いたくなるのは例え人間でも妖怪でも関係なかった。

それからも墓石を掃除しながら、アークは太陽が地平線に沈む直前になるまでずっと、墓石に向かって話し続けていた。

アークが昔の飼い主の墓参りをした日の翌日のとあるゲームセンターで、一人の男の伝説が作られていた。

《おおーっとおー！！まさかまさかのどんでん返しっ！！この店の格ゲー大会初出場のryuji選手がっ！！優勝常連のトッキー選手を決勝戦で下したああああ！！》

マイクで拡張された実況の声と共に観客は歓喜の声を上げ、店内に轟音が響いた。

《見事に優勝を果たしたryuji選手に勝利者インタビューを行いますよー！！・・・ryuji選手っ！今の心境はっ！？》

実況者にマイクを向けられたryujiと呼ばれる白に近い銀髪の180cmの高身長で18歳ほどの年齢の男は薄い笑みを浮かべながら応じた。

「いやいや・・・学校をサボってまで来たかいたぜっ！」
会場にドツと笑いが起こる。

《はいっ！ありがとうございます……それでは優勝したryuji選手にトロフィーが渡されますっ！！》

その司会者の指示と共にトロフィーを受け取ったryujiに観客が熱い拍手を浴びせた。

「
で？……人をわざわざ呼び出して何をしてるんだお前は……」

暫らくして、トロフィーを抱えて舞台から降りて来たryujiに金髪赤眼の青年　　琴紅が声を掛けた。

「
ああ！悪いな琴紅、待たせちまったか？
悪びれも無く謝るryujiに琴紅は重いため息をついた。

「……お前が急に呼び出すから、我はわざわざ実家からここまでやって来たんだけどな……龍治」

自分の数少ない友人のryuji　　いや龍治に呆れながらそう言う琴紅だった。

ところ変わって、ゲームセンター近くのファミレスで二人は向かい合って座っていた。

「
で？……人を呼び出しておいて自分はゲーム大会に夢中になっていた龍治は我に何の用があるのかな？」

「棘のある言い方するなあ……まあ俺が悪いんだけどよ」

「当たり前だ……さっさと用件を簡潔に話せ」

そう琴紅が言うと龍治は突然、琴紅の眼前で指を突き出した。

「それ……その眉間の皺だよ……お前ここんところ全然休んでねえだろ！」

「……休暇なら昨日丸一日取ったが？」

「そうじゃねえよ！俺が言ってるのは！お前は最近遊んでんのかって事だよ！！」

そう言われて琴紅は言い淀む。

確かに、最近は休むだけで、娯楽の類は全く手に付けてはいなかったが……

「それが一体どうしたんだ？」

そう琴紅が言うと龍治は心底呆れたように首を振った

「かあ……枯れてるなあ琴紅！GSってのがお前に取ってどんな物かは知らねえが！人間、なんの娯楽もねえと身体より先に精神（こころ）が参（ま）ちまうぜっ！！」

「……つまり……お前が今日我を呼んだのは……」

「応っ！遊ぶために誘ったんだぜ！！」

そう言って笑顔でサムズアップする龍治に無性に腹が立った琴紅は龍治の顔面に右ストレートを炸裂させるのであった。

またまた場所は変わってカラオケボックスへ。

「痛つてえなあ　　本気で殴ることもねえだろお琴紅」

殴られた右頬を擦りつつ龍治が言った。

「五月蠅い！なんの説明もなく呼び出して、その目的が遊ぶ為だと！？その程度で済ました我にむしろ感謝しろ」
飲み物を片手に座る琴紅がそう言い返した。

「良いじゃねえか偶に遊ぶくらい・・・」

「学校をサボってまでやることか、これはっ！？」

「大丈夫ダイジョブ・・・俺もお前も結構頻繁に休んでんだから問題ねえよ」

「・・・まったく、大体男二人でカラオケなぞむさ苦しいだけだろ
うが・・・」

「おお！！その辺は大丈夫だ昨日の内に何人か女子を誘つといたから・・・学校が終われば一気に華やかにならあ」

お前の名前を出せば、わんさか集まって来たから選ぶの大変だったぜ、などと言いながら龍治はリモコンで自分の歌う曲を入力する。

「　　はあ・・・そう言う事は準備がいいなあお前は・・・」

「ちなみにフォーゲルハット嬢も来るぜっ！！」

「　　ブッ！！？カレンがっ！？」

あのお嬢様がカラオケなんぞに行くのか！？

「・・・何思ってるかは大体想像付くけどそれは偏見だぜ琴紅・・・
フォーゲルハット嬢だってお年頃の女の子って奴だし、休日に女友
達とカラオケに行く位してるぜ」

まあ今回は、琴紅が疲れてるみたいだから元気つけてなろう
ぜって言ったたら即効で食いついて来たんだがな・・・愛されてるね
え琴紅。

最後の言葉は口には出さず胸の内に秘めておいた龍治であった。

その後は琴紅や龍治が目的の女子や、楽しいこと好きな学友など
がやって来て、閉店時間まで歌い尽くした琴紅達であった。

まあ、たまにはこんな日も良いか・・・

そう思いながら、心の中で気の利く友人に感謝する琴紅だった。

アークの休日と琴紅の友人（後書き）

はい前半はアークのちよつとした過去への感傷ですね。
んで、後半は名前だけ登場していた龍治君との話でした。
・・・そこそこ話数も出来てきたしちよつとした設定資料でも作る
うかなと思ひ始めた今日この頃。

ネタが無くともボツネタコーナー

が護廷十三隊へ入隊したら。

オレンジの髪で身の丈ほどの包丁のような大剣を背負う黒衣着物を
着た少年 黒崎一護は志波岩鷲と山田花太郎と共に朽木ルキアの
捕らえられている“織罪宮”へ向かう長い階段を登っていた。

「 ツー!? 待て一護! そこに誰かが隠れてるぞ! ! 」

志波岩鷲は柱に隠れる者の霊圧にいち早く気付き、前を走る一護
に警告する。

「 誰だっ! ! 」

「 ほう、誰だとは厚かましい者よなあ・・・此方からしてみれば、
旅禍であるお主達に聞きたいことなのだが・・・まあ良い、名を聞
かれたのなら答えよう 」

「 あ ああ! 貴方は! ! ? 」

この中で唯一、柱の影から出てきた男を知っていた花太郎は驚愕の声を上げる。

「十一番隊第四席 佐々木 小次郎」

「黒崎さん！！気を付けて！！その人は」

「参る！！」

花太郎の警告よりも速く、小次郎は五尺余りの長刀を構え一護へと切り掛かった。

はい、と言う訳で

もしFATEのアサシンがBLEACHの世界に来たら？でした。

うーん、侍っぽいし刀使うし着物だし、以外に合うか？

小次郎アサシンならオサレっぽい台詞も使うだろうし・・・

でもアサシンの斬魂刀ってどんな能力になるんだろう？

やっぱ一護の天鎖斬月みたいな身体強化系か燕返しをあらゆる方角から繰り出せる能力とかそんな感じかな・・・いや、あえて斬魂刀を持たずに霊体を切る事が出来る刀を使って自分の剣技だけで戦うってのもありか？

まあどの道自分にオサレなポエムは書けないから無理なんですけどね（笑）

GS資格取得試験（前書き）

アンケートは12時を持って終了しました。

投票してくれた皆様、ありがとうございます。

アンケートの結果、新しく琴紅の仲間になるのは2番のどSシスターに決定いたしました。

登場するまで暫らく掛かりますがどうかお待ちください。

GS資格取得試験

あれから、また暫らく経った

事務所を引越した美神令子へ引越し蕎麦を送ったりクリスマスに
アークがサンタからプレゼントを貰ったとはしゃいだり　お
前確か100歳はとくに超えてたよな？　大晦日に初詣に

行ったり　千年に一度だけ異界への通路が開くと言われてい
る社には、オチを知っていたから行かなかった　卒業式を迎
え、晴れて本格的にGS業に専念するようになったり。

あと、先日カオスの爺さんが資金を求めて来たので提供した
ら、暫らくして第二の人造人間　まあ、テレサのことだな
は失敗に終わったと報告があったりとあまり原作には関わらない
日々が続いていた。

そんなある日・・・我の事務所オレに一本の電話が入った。

「オーナー・・・お電話ですよ！何でもGS協会の方らしいですけ
ど」

「ん？　分かった、直ぐに変わる（協会から？何の様だ？）」

「はい、電話変わりました・・・社長の琴紅ですが・・・」

『ああこれはどうも・・・お手数をお掛けして申し訳ないな』

「お気になさらず・・・それで？今回はどう言った用件で？」

『では早速・・・もう直ぐ今年のGS資格試験があるのですが、もしご都合がよろしければ、その実況・解説をお願いしたいのですが』

「我が^{オレ}・・・ですか？」

まさかの原作へのお誘いであった。

「結局、断れずに当日になってしまった・・・」

ゴーストスイーパー資格取得試験会場と書かれた看板の掲げられた建物の前に、肩に黒猫バージョンのアークを乗せた黒のスーツ姿の琴紅がそうボヤキながら立っていた。

時間はまだ早朝であるため、まだ人の数は少なかったが、少し周りを見渡せばやる気に満ち溢れた人の姿がそこらじゅうで見えた。

「でもオーナーって去年の試験、首席で合格したんですよ？ 凄いですよ！」

「あまり喋るなよアーク・・・」

そう、確かに我は去年の試験で首席合格を果たした　　がそれが原因で今回の試験の実況・解説なんて物を依頼されたのだが・・・

ちなみに試験はアクセサリーにカムフラージュした身体強化系の宝具を一つ身に付けて、天の鎖^{エルキドゥ}を武器として使って戦った。

天の鎖は神性のある者を縛る時以外はただの動く鎖としてしか認識されないため、人目のある場所でもよく使っている・・・なんと言うご都合主義・・・

そう言う戦い方をした為、我は世間一般的には“変わった能力一（

異次元を作り出しそこに物を詰め込める」と高い身体能力で鎖を主力武器にして戦うGS」と言う評価をとっている。

「まあ、ここまで来てしまったら仕方ない……さつさと役員室を探して打ち合わせなんかを済まして仕舞おう……退屈だったら正体がばれない程度に辺りを見学してきてもいいぞ」

「大丈夫ですよ、いざとなったら眠らせて貰いますから」
最近アークが随分砕けてきたな……まあ気にしてないからいいけど……

「あれ？」

「どうした？」

「いえ……今一瞬、知ってる人の匂いがしたんですが……」

「カオスの爺さんじゃないのか？この前試験を受けるつもりだって言ってたし」

「あ　本当ですね、言われてみればカオスさんとマリアさんの匂いでした」

しかし開始までまだかなり時間があるが………老人の朝は早
いって奴か？

若干失礼な事を考えつつ会場内に入っていく琴紅であった。

その後、大会役員達との打ち合わせを済ませた琴紅は実況の枚方

亮・解説の厄珍と共に実況席に座っていた。

そして会場と一次審査を合格した選手が入場する準備が整った。

「まもなく本年度GS資格所得試験第一試合が行われようとしております・・・実況は私、GS協会記録部広報課の枚方亮・・・解説は厄」

「創業40年！！親切丁寧、魔法のアイテムならなんでもそろそろ厄珍堂！！信頼のブランド厄珍堂店主、厄珍がお送りするあるよっ！！」

紹介の途中でマイクを奪ったとても小柄な中年　厄珍が怒涛の勢いで喋り始めた。

「いや、あのTVじゃないんです、単なる記録用のビデオ・・・」

「厄珍厄珍やくちーんどおおー、魔法のことなら厄珍堂」

「おっさん！」

「あいててよかった厄ー珍ー」

「五月蠅い！」

ゴゴン！と枚方と琴紅による拳が厄珍の後頭部に叩きつけられ、厄珍は煙を上げるたんこぶを二つ作って黙った。

「そして、ゲストとして、前回の試験で首席合格を果たした帝督琴紅さんを実況・解説に加えて行きたいと思えます・・・・時間です！選手たちが入場してきました」

「（そう言えば我・・・今回のメドーサが関わってる件に付いては小竜姫からも唐巢神父からも何も聞いてないな・・・我を関わらせる事も無いと気を使ってくれたのか？」

人一人を気絶させた琴紅はその事を全く気にせずに物思いに耽っていた

入場してきた選手の中にはドクター・カオスや横島などの見知った顔から巨大な体格の大男タイガーや金髪的美男子、バンパイア・ハーフのピート、その他にも総勢128名に及ぶ人間が入場してきた。

「第一試合は128名、64試合が行われます！今回の審判長春野氏、組み合わせを決める“ラプラスのダイス”を振ります！」

「“ラプラスのダイス”はあらゆる霊的干渉をよせつけず、運命を示すサイコロある！このサイコロで決められたことは絶対公平かつ宿命あるね！」

一応オカルト用品のプロとして正確な解説をする厄珍であった。ちなみに琴紅はこのサイコロでギャンブルをしたことがあったのだが・・・幸運Aの琴紅の結果は言うまでも無いだろう・・・ただ一言、相手は泣いていた。

そして暫らくサイコロを振り続けた後、組み合わせが決定した。

「どーやら組み合わせが決まったよーです、各選手がそれぞれの結界に向かいます

それでは今大会ゲストの実況・解説役の琴紅さん、去年出場した経験として、ズバリ勝負の秘訣は？」

「そうだな・・・先ずは冷静でいる事だな、これは実践にも言える事です。冷静さを失ってパニックに陥つたらまず100%勝てない・・・後は・・・いかに相手を見極めることかな、あの結界の中では通常の物理的攻撃は効果がないから、自然、攻撃は全て霊力を纏わなければいけないが、それは逆を言えば例え総合格闘技の世界チャンプにさえ、格闘技の経験が一切無い霊能力者でも勝つことが出来るってことだからな」

「えーと・・・つまり？」

「あの中じゃあ幾ら身体を鍛えてようが無駄ってこと、要するに見た目に惑わされるなって事だな」

「ああなるほど」

納得した様子の枚方は会場の実況へと戻った。

「あーあ、解説のあの子可愛い・・・」

その頃とある受験者一（男）が琴紅を見て舌なめずりをしていたりしていなかったり・・・

「（ ） ゾクッ！！？） な なんだ今の悪寒は！？・・・」

その瞬間何故か琴紅は後ろの穴に危機を感じたりしていた。

「ではまず注目の一戦。今大会最年長の“ヨーロッパの魔王”ドクター・カオスの試合を見てみましょう！」

「ありや！？令子ちゃんこのボウズあるな」

結界の中にいる横島の姿を見付けた厄珍が言った。

「令子ちゃんと言いますと・・・美神令子!？」

「そうある!」

「いきなり燃える展開です！運命の女神は何を思っこの対戦を仕組んだでしょう!!!・・・ゲストの琴紅さんこの対戦をどう思われますか？」

「いや・・・どうも何も・・・横島選手、大分腰が引けてないか？まあ個人的にはカオスの爺さんには合格して欲しいけど・・・1000歳を超える年齢のカオス爺さんがどうやって戦う気なのかは注目だな」

「そうだった！勝てなくとも相手はジジイ！胸から出す怪光線から逃げ切れれば、少なくとも無キズで・・・」

その実況を聞いていた横島は多少の余裕を取り戻した・・・が

「行くぞ、マリアー!!」

「イエス・ドクター・カオス!!」

「じらあー　　っ！！！」

「おーっとドクター・カオス自分で作り上げたロボットを道具として使用するようですよ！」

「　　まあ、この試験は原則として道具は一つだけならナニを使ってもいいからルールとしては問題ないが・・・」

「さつきもボウズが言ってたあるが、結界内では霊的干渉以外はダメージが与えられないからマリアのパワーもここでは役に立たないあるね。」

厄珍の言葉通りマリアが放ったロケットパンチ　　正式名はロケットアームだが　　は横島に当たる直前に弾かれ、なんのダメージも与えられなかった。

「くらえっ！！！」

それを見たドクター・カオスは自分のマントを広げて胸に描かれた魔方阵から怪光線を放つ。

「でええええええええっ！！！」

それを泣きながら必死にかわす横島、この辺りは人間離れした反射神経と逃げ足の賜物だろう。

「おのれチヨコマカと・・・！マリア！奴の動きを止めるのじゃ！！！」

「イエス・ドクター・カオス！！！」

「もう駄目っ！！もう無理だっ！！おっちゃん！！キブアツ・・・」
横島が絶えかねてギブアップを宣告しようとしたその時、カオスの指示で腕に内包された機関銃で横島の足元へ射撃を開始したマリ
ア。

「よーし！いまじゃ！」

そうして動きを止めた横島に止めを刺そうとした瞬間

「勝負あり！勝者、横島！！」

「え？」

突然審判が終了の笛を吹き横島の腕を上げて宣告した。

あまりの出来事にカオスはズッコケ、横島自身も訳が分からなかつた。

「待たんかいつ！！！どうということじゃっ！？」

納得のいかないカオスが審判に講義する。

「説明します！物理的攻撃はダメージになりませんので原則的に何でもアリですが、ただいまの攻撃は・・・」

そう言って審判はマリアを指差しこう言い放った

「銃刀法違反です！！」

「「だああっ」」

横島とカオスがズッコケた

「おーっとこれはうっかりしていました！！常識です！！常識を忘れておりました、ドクター・カオス」

「……………なんじゃそりゃ……………」
この辺の細かい部分は忘れてしまっていた琴紅は呆れた声を出した。

「警官隊がカオス容疑者（1051）を連行します！アンドロイドは証拠として押収されるようです」

「う、うかつだったあぁ〜!!」

「……………」

あまりの展開に呆然とする横島だった。

「…つーか、何でこんなに早く警察が？…待機してたのか？」

そしてどうでもいい事を気にしていた琴紅だった。

ちなみに琴紅は帯刀許可を取っていないので気を付けなければ逮捕される可能性も無きにしも有らずだった……………完全に蛇足である。

「い……………一回戦突破!?あと一回まぐれでも何でも勝てばGS! ?なんか……………なんかこれは……………意外な展開の予感じゃあああっ!!ひよっとして……………ひよっとして……………」GS横島極楽大作戦”!?”」

「それは絶対に無かったから安心しろ」

次々に一回戦突破者が現われる中で叫んでいた横島に琴紅はそう呟いた。

GS資格取得試験（後書き）

はい、と言う訳で原作9巻まで終わりました。

・・・すいません、本当はもう一話くらいオリジナルを挟もうと思つたのですが、考えつかなかったので多少キング・クリムゾンして一気にGS試験編に導入しました。

今日久しぶりにPV数を見たら500000を超えてて吹きました

ww

いつも見てくれている皆さん、本当にありがとうございます。

今日も今日とてボツネタコーナー

「義星」の男が大海賊時代に賞金稼ぎを始めたようです。

「ここは何処だ・・・島？俺は確かユダとの戦いの後、確かに死んだはず・・・！！？視えない！？死兆星が視えなくなっている！？」

最初は戸惑いを隠せなかった義星の男 レイだが、とある島での惨劇が彼のこの世界の生き方を決めた。

「た・・・助けてっ！」

「ヒャッハー！誰も助けなんぞ来んぞお！！この賞金額2500万ベリー“残虐”のモカヒン様に逆らう奴はこの辺りの海には存在しねえ！なあ？お前ら！？」

「ヒャッハー！！そうだぜ！モカヒン船長や俺たちに逆らう奴なん

ざいねええのさ！」

そこで見たものは弱気者を食い物にする海賊たち。

「それはどうかな？」

「ああん？なんだ手前えは！？」

「フウウウウウ　　シャオツ！！！」

「ワギリッ！！？」

レイは近くにいる海賊を細切れに切り裂いた。

「なっ！！？手前っ！よくも俺の部下たちを！！！」

「ふんっ、南斗水鳥拳の前では貴様らなどゴミ屑同然だッ！」

荒れる大海賊時代に、義星の男は何を見るのか・・・

後にこの男は賞金稼ぎ“水鳥”のレイと呼ばれることになるが、それはまた先の話。

はい、北斗の拳のレイがワンピースの世界に行ったら？でした。北斗のキャラってやっぱり小説にし辛いことが再認識できました。ってか書いてて思ったけどレイがルフィの敵になったらルフィやばくね？

ボツネタ考えるのそろそろ大変になって来たと思う今日この頃・・・

GS資格所得試験 一回戦開始(前書き)

どうも庶民です。

何とか連続更新継続中です・・・

なんか最近やっつけ気味になって来た気がします。
いかな、もっと精進しないと

GS資格所得試験 一回戦開始

横島の勝利と言つどんでん返しが会つたものの、その後のGS試験一回戦もほぼ消化し、残すところ後数試合となった。

「いや、今回の試験は中々レベルの高い受験者が多いですね琴紅さん」

「そうだな・・・何人かはアマチュアの域を超えている者もいるな」

「では・・・今の段階で注目している選手はいますか？」

「ふむ・・・今の所はミカ・レイ選手、ピエトロ・ド・ブラドー選手、それに白龍会の伊達・雪之丞選手と鎌田・勘九朗選手・・・あとダークホースとして横島選手も注目できるな」

「なるほど・・・あつ！ たつた今、本日最後の試合が終わつたようです」

「見てなかつたあるか？ あの子供の圧勝だつたあるよ！」

「（ ） そう言えばアークの奴、会場に入ってから姿が見えないが・・・何処行つたんだ？」

試合が終わつたと言う事で気が抜けた琴紅はいつの間にかいなくなつていた従業員のことを考えていた。

「・・・もつとも、その答えは直後に分かることになるが・・・」

「いや、しかし凄いものですね・・・あんな小柄な体系であの大男に圧勝するとは！」

「まあ、はじめにも言ったが、あの結界の中では体格よりも霊能力の強弱によって実力は決するからな」

「なにはともあれ、“アーク”選手！一回戦勝利です！！」

ズガンツッ！！
と言う音を響かせて琴紅は解説席の机に頭をぶつけた。

「ちょ・・・ちょっとまって！！」

慌てて会場を見た琴紅の目に、笑顔で自分に手を振っているアークの姿が映った。

「（アイツっ！？なんか最近様子がおかしいと思ってたら、こんなこと企んでたのか！？）」

「ど　どうかしたんですか？資料には、琴紅さんからの推薦で試験を受けに来ていると書いてありますが・・・？」

「（・・・・・・受けてしまった物はしょうがないか）」

あ、ああ、期待していた以上だったから驚いていただけだ・・・どの道、今更自分が受けさせる気は無かったなどと言っても試験関係者にいらぬ迷惑を掛けてしまうだけなので、仕方無しに話を合わせる事にした琴紅であった。

「（　　後で覚えておけよ・・・）」

そう思いながらアークを睨む琴紅だった。

「（やるのなら徹底的にやれ！ですね、分かりましたッ！！）
」
しかしアークには全く伝わっていないかった。

その後 試験初日が終了し、事務所に帰った琴紅はアークに尋問（O H A N A S I ）兼拷問オソキを実行しようとしたのだが、アークの「僕が資格を取れば、少しでもオーナーの負担が減るかと思っただんですが・・・すみませんでした」との涙目&上目使いの（見た目美少女のため破壊力充分）コンボで怒るに怒れなくなってしまうた琴紅は「ま、まあ受けるのは個人の自由だが・・・怪我をしても知らんぞ」と言うツンデレ台詞だけで済ましてしまうのであった。

なんだかんだ言ってもアークに甘く成りつつあった琴紅だった。

そして翌日

「いよいよ合格ラインを決める第二試合です！選手の顔も心なしが緊張きみです」

「まあ、この試合で勝つか負けるかでその後の人生に関わりかねない人間も無きにしも有らずだからな・・・ぶっちゃければ負ければ二トトかフリーター確定の人間もいるからな」

「はい！辛辣かつ現実を抉る意見をもらえた所で、まもなく第二試合が開始されます！」

「(でもそんな中でもなんか悟ったような顔の奴が約一名いるんだがな・・・)」

「(ポー)

その約一名は何故か完全にリラックスをしている横島であった。

「なんなの、そのたわけた表情は？」

若干引き気味に美神　　いやミカ・レイは尋ねた。

「ふっふっふ・・・美神・・・いやミカ・レイさん、悟りの境地っすよ

運が良けりゃ勝つし、悪けりゃ負ける、結局はそれだけのことっすね

ま、人事を尽くして天命を待つと」

「いつどこで人事を尽くしたのよ？」

あまり言えばあまりの考えに呆れたようにミカ・レイは言い、その後自身をなくしていた某吸血鬼に活を入れたりしたが、その辺は原作読め(オイ)

そして、その頃一(一応)メインキャラのアークはと言うと・

「(大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫！僕ならやれる僕ならやれる僕ならやれる僕ならやれる)」

途轍もなく緊張していた。

「 ） ガチガチだなアイツ・・・ま、まあ参加したのは自己責任かつ自業自得なんだから怪我しない程度に反省すればいいんだよ！」

意外と心配性かつツンデレ属性持ちの主人公だった。

「最初の試合がそれぞれの結界で始められます、やはり注目すべきは昨日琴紅さんも言っていたミカ・レイ選手ですね」

「そうある！あそこあのねーちゃん！」

最初に解説席が興味を持ったのは、美神令子の変装したミカ・レイであった。

対してその相手はミカ・レイの倍ほどの大きさの屈強な男であった。

「ふっふっふ・・・女とはツイてるぜ」

男はミカ・レイを見て薄笑いを浮かべていた

「さあ対するはパワー志向の蛮・玄人選手！ぜひとも彼女に「いやーん」とか言わせてほしいものです！」

「まず、十割無理だろうけどな・・・」

変な方向に期待する実況の願望をミカ・レイの正体を知っている琴紅は一も二もなく両断するので合った。

「100%だ！100%の力で勝負してやろう！せめてものハンデだ
ハアアアアアア！」

「すさまじい靈波です！これで本当に100%なのでしょうか！？」

などと余裕を扱いてた蛮だったが、ミカ・レイが霊力を籠めた扇で一振りするだけで、吹きどばされて再起不能となった。

「あーっと！もう終わってしまいました！ほんの数行にも満ちません！面白くもなんともない！！」

「ま・・・待て・・・まだあと90%が・・・」

「方っておきましよう！こんなバカは相手にするだけ無駄です！」

「明らかにMAXだったが・・・霊力たったの5マイルか・・・
ゴミめ」

「ん？琴紅さんなんですかその目に付けてる機械は？」

「ドクター・カオス作の霊力強度探知機だ・・・ようするにスウターだな」

「なんあるかソレツ！カオスの奴そんな便利な物作ってたあるかつ！？」

「資金さえ出せばいろんな物作るぞ・・・老衰しても“ヨーロッパの魔王”は伊達じゃないな」

「あっ、そう言ってる間に注目のダークホースの横島選手の試合も始まっています！相手は18歳の女性九能市氷雅選手です！」

「うーん・・・防戦一方だが巧くかわしているな・・・現場仕込みの実力は伊達じゃないと言う事か？」

実際は相手を取り出した霊刀ヒトキリマルに怯えて逃げ回っている

ただだが・・・

しかも相手の怪しげな忍術で「ギブアップ」と言えなくなっていた。見た目が美人だったためホイホイ結界に入ってしまった横島の完全な自業自得であったが、相手のほうも「人を切るのは初めて」などと危ない目をしているので逃げたくなるのも分かるが・・・

だが追い詰められた時、横島のバンダナから一つの眼が現われた

《大丈夫だ！！案ずるな！！このような敵に倒されるそなたではない！！》

「えっ！？」

それは小竜姫が竜氣を授けた事によりバンダナに宿った“心眼”であった。

その後、バンダナの的確な指示により試合を優勢に進めた横島は、最後に相手が繰り出した“霊的格闘モード”なるコスチューム（全身にピッタリと張り付いた黒タイツ）を見て煩惱エネルギーを一気に放出した横島は氷雅を結界をぶち破って外へと弾き出し勝利した。

「ああ・・・あの煩惱をくらったらたまらないな・・・」

「勝者横島！！」

そして審判によって横島は右手を上げられ、GS資格所得が（現時点では）決定したのであった。

「さて、次の試合はゲストの琴紅さんも必見のアーク選手の試合で

す！どうせなので琴紅さんアーク選手に一言！」

「え？ あゝ・・・程々に頑張れ・・・」

「ありがとうございます！それでは試合開始です！！」

アークは結界の中でインディアンのような上半身裸で何らかの模様が描かれた格好の男と向き合っていた。

「（ううー・・・やっぱりに見られてると思うと緊張するなあ・・・深呼吸深呼吸） スーハー、スーハー」

いまいち緊張の抜けないアークは何度も深呼吸をしていた。

ちなみにそれを見て微笑ましそうに会場が見守っていた・・・一部のお姉さまや特殊な趣味を持つ男は息を乱していたが・・・

「スー ふう・・・よしっ！やるぞっ！」

「子供の姿と言って俺は油断しないぞっ！！

風のあるところに神あり！！神のあるところに力あ つが！！？」

アークの準備が整ったと見るや、霊力を集中させて男が周囲の風を自分の元を集めようとしたが・・・

一瞬で懐に入ってきたアークによって顎を力チ上げられ、その衝撃で意識を失ったのだった。

「 しよ！？勝者アーク選手！？」

「おーっと！？一瞬！！まさに一瞬で勝負が付きました！！なんと言う強さっ！？アーク選手の圧勝です！！！」

「（そりゃ、あれでも百年単位で生きてる妖獣だしな・・・高々20やそこらの凡人には負けないだろうけど・・・っ！か今更だけど妖怪がGS資格試験なんて受けて良いのか？）」

「バンバイア・ハーフのピートでさえ普通に試験受けれてるんだから問題ないだろう。」

「もし原作より未来が合ったのならシロやタマモもいずれ受けてただろうし・・・」

「（ん？・・・！？チヨツト待て！？今アークが勝った相手は確か原作で勘九朗と戦った奴じゃなかったか！？）」

「出番がほぼ一瞬だったため今まで全く気付かなかった琴紅だが、確かにその男は原作で勘九朗と戦い、これまた一瞬で敗れた相手だった。」

「（って事はまさか！？アークの次の相手は勘九朗！？）」

「その事実気付いた琴紅はすぐさまアークに視線を向け目を合わせた。」

「（次の試合は分が悪すぎるっ！わざとでも良いからすぐに負けるっ！！）」

「琴紅は必死にアークに目でそう伝えた。」

「（ここまで来たんだから去年の我オレのように優勝して見せる！ですね、分かってますよマスター！）」

「しかし先日と同様に全く伝わらず、かえってアークは危機に近づいて行くのだった。」

波乱のGS試験はまだまだ続く

GS資格所得試験 一回戦開始(後書き)

今回は横島VS陰念

ピートVS雪之丞

アークVS勘九郎

を何とかしたいと思います・・・でも最悪、前二つはダイジェスト風になってしまう可能性高し。

今回はボツネタが浮かびません(泣)

オリジナルの話の妄想は結構浮かぶんですが、奇抜なクロスオーバーが浮かばななな・・・

もうせいぜい平野耕太先生のドリフターズの世界にBASARAの伊達政宗が行ったらとか、とても文章に出来そうにないものばかり出てきます・・・

まだ原作一巻しか出てないから書きようがないんだよ!!

庶民は基本簡潔している作品の二次しか書かない、だってそうしないと後に出てくる原作設定で致命的な矛盾が出るのが怖いから・・・
・ 実際戯れで書いた禁書二次は全く進まない。

三回戦（前書き）

すみません、長らく放置していて皆様の期待を踏みにじる行為だと自覚しつつも、伝えなければ行けない事があります。

率直に言うと、限界です。

GS熱もfate熱もすっかり冷めてしまい、時間を置けば復活するかと思っただのですが、もはやこの作品を書くことその物が苦痛になっしまいました。

やはり初投稿でGSのように完成された長編を書くことは無理が合ったようです。

こんな作品にお気に入り登録をしていたただいた皆様へは大変心苦しいのですが、黄金のGSは今後、永続的な更新停止を致します。

今更何を行っているのだと思われる方もいますでしょうが、未だに更新を信じて待っている人が居るかもしれないと思うと、言わない訳には行かなかったのです。

私自身の計画性のなさで怠慢がこの様な事態となっしまいました本当に申し訳ありません。

次の作品を作る際は、この作品の失敗と経験を生かして、より良い作品を作って行くことがせめてもの償いだと思い一生懸命考えて行きます。

まだ、何をするかも決まっていますし、いつになるかも分かりませんが、また再び皆様にお会いする事が出来たならその時はまたよろしくお願い申し上げます。

三回戦

二回戦が全て終了し、多少の休憩時間を置いてさっそく三回戦
注目すべき(?)ダークホース(笑)横島对白龍GS所属の隠念の
試合が始まった。

開始序盤、隠念が霊波動を先制で放つが横島は難なく迎撃する。
その直後、接近した横島の右パンチが直撃した・・・が、寸前に全
身の傷口から霊波動を放つ斬新過ぎる不意打ちによって殴るのに使
うはずだった霊力を防御に使ったことで威力は激減し、
結果、相手を怒らせてしまった。

「あー今ので倒せなかったのは痛いな横島選手」

「どうしてですか？」

無意識に呟いた琴紅の言葉に実況が反応する。

「あの隠念と言う男、明らかに相手を見下していたが故に隙だらけ
だったんだが、今の攻撃で油断が無くなってしまった」

そう言った直後、隠念の体が霊波で覆われて行く。

「あ、あれはいっいたい!？」

「あれが【魔装術】か」

「知っているんですか!?!電で・・・琴紅さん!?!」

「【魔装術】…悪魔と契約を交わすことで自らの肉体を一時的に魔物へと変化させる事によって飛躍的に力を上げることが出来る術だ…まさかこの目で見る事になるとは…」
それにしてもこの主人公、ノリノリである。

横島はその後、ハツタリによって隠念を警戒させつつ時間を稼ぎ、じれた隠念が飛び込んで来たのを自力で自身の手で靈力を集中させ隠念を覆う靈波に触れながら回避し逆に自爆によって隠念自身がダメージを受けた時、異変が起きた。

「グワアアアア！！」

「こ、これは隠念選手の動きが妙です」

「不味いな…魔装術のコントロールが限界超えたか」

突如として隠念が苦しみだし、靈波の鎧が崩れ、先程と違い本物の魔物へと姿を変え暴れ始めた。

《グウウウガアア！！》

「あーっと隠念選手、結界を破って外へ！？どうやら理性を失っているようです！」

「誰かつ！彼を取り押さえる！」

《アアアアアアッ！！》

手当たり次第に近くの職員に襲い掛かろうとする隠念に同郷の雪之

丞と勘九朗が手を下そうとしたその時。

「お痛が過ぎるぞ、チンピラ」

無数の鎖が魔物と化した隠念を縛った。

《グガッ！？》

自身を拘束する鎖を引きちぎろうと必死に体を揺らす隠念だが、鎖は多少擦り合う音を鳴らすだけでビクともしない。

「・・・まったく、悪魔と契約なんかするからこんな目に会ったよ…自分の限界も把握してなければGSになれるわけ無いぞ」

会場に降り立った琴紅は呆れた様に隠念と白龍GSの二人を見ながら語る。

《グウウギイイ！！》

当然、理性を無くした隠念に聞こえる訳もなく、無意味にも暴れようとする隠念に琴紅は…

「五月蠅い」

無慈悲にも叩き潰した。

それはもう見ていた者も惚れ惚れするほどに容赦も情けもない踵落としだった。

「救護班、あとは任せた！」

そう言って琴紅は一瞬だけ観客席に目を向け…何事もなかったかの様に解説席へと戻っていった。

「隠念選手、試合続行不可能につき、横島選手の勝ち!!」

何はともあれ、試合は横島の勝利となった

「勝ったの!？」

お：俺って結構すごいくない？」

この結果に一番呆然としているのは横島自身であったが、最後の土壇場で自分で霊波のコントロールをしたのだから、偶然では無い。そもそも、いくら悪運が強かろうとそれだけでこの試験で生き残れる訳が無い。例え小竜姫に与えられたバンダナの力を借りたとしても、その大元の力は横島本人の物なのだから。

「（我オレの様な全てが借り物の力とは違うのだから）」
誰にも聞こえない心の中で、琴紅は自嘲気味にそう呟くのだった。

続いているピート対雪之丞の試合は最初こそ雪之丞が優勢に進めていたが、ミカ・レイ（美神令子）の言葉によって吸血鬼の力を使い出したピートに対し昆虫の攻殻の様な隠念よりも数段上の魔装術を纏った雪之丞

この二人の戦いは一進一退、まったくの互角だった。

試合が長引けば吸血鬼の血を引くピートの有利…そのはずだったが、
だが。

「痛ウ!？」

「隙ありっ!?!」

「うわあああつ！？」

何かに一瞬気を取られたピートはその隙を突かれ、無数の霊波動を受けてしまった。

「ふ…トロイ奴だ、まともに喰らうとはな…だが、楽しかったぜ！
こんな戦いは久しぶりだ！」

魔装術を解除し乱れた息を整えながらピートに話し掛ける雪之丞だが

「き…貴様…汚いぞ…あんな…てを」

「何！？俺が汚いだと！！と言う事だ！？」

問い掛ける雪之丞だがピートは気を失ってしまい、答えを聞くことは出来なかった。

波乱の資格試験はまだまだ続く

三回戦（後書き）

前書きで長々と失礼しました。

この黄金のGSはこの様な「俺達の戦いはこれからだ」等の引きもせず、このような中途半端極まりない話で終了します。この様な作品に様々な感想をありがとうございます。

最後に特に人気でもなかったボツネタで終わらしたいと思います。

めだかボツクス〜回想風マイナスオリ主紹介〜

鹿食曹かじきしかは幼少時代から束縛を嫌う少年だった。

正確に言うなら我慢の出来ない少年で、自身がしたいと思った事や衝動的な欲求には一切逆らおうとはしなかった。

そんな曹に両親は必死に自重を覚えさせようとするが曹は何一つ聞かず、何時しか両親も諦めて行った。

そんなある日異変が起きた、仲むつまじい両親が些細な…本当に些細な出来事で両者共に数力月の入院が必要なほどの夫婦喧嘩を曹の目の前で始めたのだ。

それだけでは終わらず、両親が入院中に世話になっていた親戚の家でも、おかずをひとつ多く食べたのだ、廊下で軽くぶつかったのだの理由だけで仲のよい親戚夫婦や兄弟達は本気で喧嘩を始めたのだ。その時から曹は自分だけだけでなく自分の周りの人間を我慢出来ない人間にしてしまうのだと薄々勘付き悩んでいた。

自分が居るだけで仲のよい人間たちが崩壊してしまう。

幼い曹には重すぎる重圧だった。しかし、そんな曹にある転機が訪れた。とあるテレビ番組で心理学者だか脳科学者だかがこう言ったのだ。

「人間は遣りたいことを我慢するとストレスが溜まりますからね… たまにはガス抜きのために喧嘩をするくらいで丁度良いんですよ… ほんら、喧嘩するほどなんとやらって言うでしょ」

それは曹に取って衝撃だった。勿論、これを言った学者に悪気は無かったのだが、結果的にこの何気ない自分の発言が多くの人を不幸にするとは思ひもしなかつただろう。

我慢すると体に悪い、ならば自分はいろんな人にどんどん近づいて皆のストレスを解消させる義務があるのだ。

何の根拠も無しにそう決めつけた曹はその後、通った学校を悉く学級崩壊へと導き、何百人もの教師と生徒の未来を奪いながらも堂々と進級していった。

過負荷【ストレスアップ不満解消】の曹の最も最悪な部分マイナスは、自身の行動でリミットを外せば人々は幸せだと信じ切っている事だった。

他人を幸せプラス（プラス）にしたいと思い、結果取り返しの付かない不幸へと墜とす。

それが鹿食曹と言う少年の生きがいで生涯で傷害で他人への障害だった。

別に次回作はめだかの予定は無いのであしからず。

今まで本当にありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5355k/>

黄金のGS

2011年5月16日22時52分発行